

五重塔（幸田露伴）

其一

木理美しき槻洞、縁にはわざと赤檜を用いたる岩畳作りの長火鉢に対して話し敵もなくただ一人、少しは淋しそうに坐り居る三十前後の女、男のように立派な眉をいつ掃いしか剃ったる痕の青々と、見る眼も覚むべき雨後の山の色をとどめて翠の匂いひとしお床しく、鼻筋つんと通り眼尻キリりと上り、洗い髪をぐるぐると酷く丸めて引裂紙をあしらいに一本簪でぐいと留めを刺した色気なしの様はつくれど、憎いほど烏黒にて艶ある髪髪の毛の一本綜二綜後れ乱れて、浅黒いながら渋気の抜けたる顔にかかれる趣きは、年増嫌いでも褒めずにはおかれまじき風体、わがものならば着せてやりたい好みのあるにと好色漢が随分頼まれもせぬ詮議を蔭ではすべくに、さりと外見を捨てて堅義を自慢にした身の装り方、柄の選択こそ野暮ならね高が二子の綿入れに縹子襟かけたを着てどこに紅くさいところもなく、引っ掛けたねんねごばかりは往時何なりしやら疎い縞の糸織なれど、これとて幾たびか水を潜って来た奴なるべし。

今しも台所にては下婢が器物洗う音ばかりして家内静かに、

ほかには人ある様子もなく、何心なくいたずらに黒文字を舌端で舐り躍らせなどしていし女、ぷつりとそれを噛み切つてぷいと吹き飛ばし、火鉢の灰かきならし炭火体よく埋け、芋籠より小巾とり出し、銀ほど光れる長五徳を磨きおとしを拭き銅壺の蓋まで奇麗にして、さて南部霰地の鉄瓶をちゃんとかけし後、石尊様詣りのついでに箱根へ寄つて来しものが姉御へ御土産とくれたらしき寄木細工の小織麗なる煙草箱を、右の手に持った鼈甲管の煙管で引き寄せ、長閑に一服吸うて線香の煙るように緩々と煙りを噴き出し、思わず知らず太息吐いて、多分は良人の手に入るであろうが憎いのつぞりめが対うへ廻り、去年使うてやった恩も忘れ上人様に胡麻摺り込んで、たつてこん度の仕事をしようとしの分も知らずに願いを上げたとやら、清吉の話しでは上人様に依怙鼻眞の情はあつても、名さえ響かぬのつそりに大切の仕事を任せらるることとは檀家方の手前寄進者方の手前もむつかしきうなれば、大丈夫此方に命けらるるにきまったこと、よしまたのつそりに命けらるればとて彼奴にできる仕事でもなく、彼奴の下に立つて働く者もあるまいなれば見事でかし損ずるは眼に見えたこととのよしなれど、早く良人がいよいよ御用命だったと笑い顔して帰つて来られればよい、類の少い仕事だけに是非して見たい受け合つて見たい、欲徳はどうでも関わぬ、谷中感應寺の五重塔は川越の源太が作りおった、ああよくで

かした感心なと云われて見たいと面白がつて、いつになく職業に気のはずみを打って居らるるに、もしこの仕事を他に奪られたらどのように腹を立てらるるか肝癢を起さるるか知れず、それも道理であつて見れば傍から妾の慰めようもないわけ、ああなんにせよめでとう早く帰つて来られればよいと、口には出さねど女房氣質、今朝背面からわが縫いし羽織打ち掛け着せて出したる男の上を氣遣うところへ、表の骨太格子手あらく開けて、姉御、兄貴は、なに感応寺へ、仕方がない、それでは姉御に、済みませんがお頼み申します、つい昨晩酔まして、と後は云わず異な手つきをして話せば、眉頭に皺をよせて笑いながら、仕方のないもないもの、少し締まるがよい、と云い云い立つて幾らかの金を渡せば、それをもつて門口に出で何やらくどくど押し問答せし末こなたに來たりて、拳骨で額を抑え、どうも済みませんでした、ありがとうござります、と無骨な礼をしたるもおかし。

其二

火は別にとらぬから此方へ寄るがよい、と云いながら重げに鉄瓶を取り下して、属輩にも如才なく愛嬌を汲んでやる桜湯一杯、心に花のある待遇は口に言葉の仇繁きより懐かしきに、悪い請求をさえすらりと聴いてくれし上、胸にわだかま

りなくさっぱりと平日のごとく仕做されては、清吉かえって心羞かしく、どうやら魂魄の底の方がむず痒いように覚えられ、茶碗取る手もおずおずとして進みかぬるばかり、済みませぬという辞誼を二度ほど繰り返せし後、ようやく乾ききつたる舌を湿す間もあらせず、今ごろの帰りとはあまり可愛がられ過ぎたの、ホホ、遊ぶはよけれど職業の間を欠いて母親に心配さするようでは、男振りが悪いではないか清吉、汝はこのごろ仲町の甲州屋様の御本宅の仕事が済むとすぐに根岸の御別荘のお茶席の方へ廻らせられて居るではないか、良人のも遊ぶは随分好きで汝たちの先に立つて騒ぐは毎々なれど、職業を粗略にするは大の嫌い、今もし汝の顔でも見たらばまた例の青筋を立つるに定まつて居るを知らぬでもあるまいに、さあ少し遅くはなつたれど母親の持病が起つたとか何とか方便は幾らでもつくべし、早う根岸へ行くがよい、五三様もわかつた人なれば一日をふてて怠惰ぬに免じて、見透かしても旦那の前は庇護うてくるであらう、お朝飯がまだらしい、三や何でもよいほどに御膳を其方へこしらえよ、湯豆腐に蛤鍋とは行かぬが新漬に煮豆でも構わぬわのう、二三杯かつこんですぐと仕事に走りやれ走りやれ、ホホ睡くても昨夜をおもえば堪忍のなろうに精を惜しむな辛防せよ、よいは弁当も松に持たせてやるわ、と苦くはなけれど効驗ある薬の行きとどいた意見に、汗を出して身の不始末を慚ずる正直者の清吉。

姉御、では御厄介になつてすぐに仕事に突つ走ります、と驚掴みにした手拭で額拭き拭き勝手の方に立つたかとおもえば、もうさらさらざらつと口の中へ打ち込むごとく茶漬飯五六杯、早くも食うてしまつて出て来たり、さようなら行つてまいります、と肩ぐるみに頭をついと一ツ下げて煙草管を収め、壺屋の煙草入三尺帯に、さすがは気早き江戸ツ子氣質、草履つっかけ門口出づる、途端に今まで黙つていたりし女は急に呼びとめて、この二三日にのっそりめに逢うたか、と石から飛んで火の出しごとく声を進らし問いかくれば、清吉ふりむいて、逢いました逢いました、しかも昨日御殿坂で例ののっそりがひとしおのっそりと、往生した鶏のようにぐたりと首を垂れながら歩行いて居るを見かけましたが、今度こつちの棟梁の対岸に立つてのっそりの癖に及びもない望みをかけ、大丈夫ではあるものの幾らか棟梁にも姉御にも心配をさせるその面が憎くつて面が憎くつて堪りませねば、やいのっそりめと頭から毒を浴びせてくれましたに、あいつのことゆえ気がつかず、やいのっそりめ、のっそりめと三度めには傍へ行つて大声で怒鳴つてやりましたればようやくびつくりして梟に似た眼で私の顔を見つめ、ああ清吉あーにーいかと寢惚声の挨拶、やい、汝は充分好い男児になつたの、紺屋の干場へ夢にでも上つたか大層高いものを立てたがって感応寺の和尚様に胡麻を摺り込むという話したが、それは正気の沙汰か寢

惚けてかと冷語をまっ向からやつたところ、ハハハ姉御、愚鈍い奴というものは正直ではありませんか、なんと返事をするかとおもえば、我も随分骨を折つて胡麻は摺つて居るが、源太親方を対岸に立てて居るのでどうも胡麻が摺りづらくて困る、親方がのっそり汝やってみろよと譲ってくれればいいけれどもものうとの馬鹿に虫のいい答え、ハハハ憶い出しても、心配そうに大真面目くさく云つたその面がおかしくて堪りませぬ、あまりおかしいので憎つ気もなくなり、篋棒めと云い捨てに別れましたが。それぎりか。へい。そうかえ、さあ遅くなる、関わらずに行くがよい。さようならと清吉は自己が仕事におもむきける、後はひとりで物思い、戸外では無心の児童たちが独楽戦の遊びに声々喧しく、一人殺しじや二人殺しじや、醜態を見よ鬻をとったぞと号きちらす。おもえばこれも順々競争の世の状なり。

其三

世に栄え富める人々は初霜月の更衣も何の苦慮なく、紬に糸織に自己が好き好きの衣着て寒さに向う貧者の心配も知らず、やれ炉開きじや、やれ口切りじや、それに間に合うよう是非とも取り急いで茶室成就待合の庇廂繕えよ、夜半のむら時雨も一服やりながらでのうては面白く窓撲つ音を聞き

がたしとの贅沢ぜいたくいうて、木枯こがらし凄まじく鐘の音氷こるようになって来る辛くるき冬をば愉快こころよいものかなんぞに心得こころらるれど、その茶室ちやむの床板とこいた削りに鉋かんな礪ぐ手の冷えわたり、その庇廂やまとの大和がき結むすいに吹きさらされて疔癰せんしやくも起すことある職人風情ふぜいは、どれほどの悪い業ごうを前の世になしおきて、同じ時候ひとに他とは違い悩くるめ困くるしませらるるものぞや、取り分け職人仲間の中でも世才うとに疎とく心好き吾夫うち、腕は源太親方さえ去年いろいろ世話して下されし節おりに、立派なもののじやと賞ほめられしほど確たしか実なれど、寛濶おうえうの氣質きだてゆえに仕事も取り脱はくりがちで、好いことはいつも他ひとに奪とられ年中嬉うれしからぬ生活かたに日を送り月を迎うる味気あじなさ、膝頭ひざがしらの抜けたを辛くるくも埋め綴つづった股引ももひきばかりわが夫にはかせおくこと、婦女おんなの身としては他人よその見る眼も羞はかずかしけれど、何にもかも貧がさする不如意に是非しのなく、いま縫いう猪之いのが綿入れも洗い曝さらした松坂縞まつざかしま、丹誠一つで着きさせても着きさせ栄はえなきばかりでなく見ともないほど針目はりめがち、それを先刻さつきは頑がん是ぜない幼な心といいながら、母様其衣そは誰がのじや、小さいからは我われの衣服いふくか、嬉しいのうと悦よろこんでそのまま戸外おもてへ駈いけ出し、珍らしゅう暖かい天氣に浮かれて小竿こさお持ち、空に飛び交う赤蜻蛉あかとんぼを撲はたいて取ろうとどこの町まで行いったやら、ああ考え込めば裁縫しやうとも厭いと気になつて来る、せめて腕の半分も吾夫の氣心が働はたらいてくれたならばこうも貧乏はしまいに、技倆わざづはあつても宝の持ち腐れの俗諺たとえの通り、いつそ

の手腕うでの頭あわれて万人の眼に止まるということの目的あてもない、たたき大工穴鑿あなほり大工、のっそりという忌々いまいましい譚名あだなさえ負おわせられて同業中なにかまうちにも軽かろしめらるる齒痒はがゆさ恨めしさ、蔭かげでやきもきと妾わたしが思うには似にず平氣なが憎にくらしいほどなりしが、今度はまたどうしたことか感応寺に五重塔の建つということ聞きくや否や、急にむらむらとその仕事を是非しする氣になつて、恩のある親方様が望のぞまるるをも関かんわらず胸欲むねに、このような身代の身に引き受うきようとは、ちとえら過ぎると連れ添わたしう妾わたしでさえ思うものを、他人はなんと噂うわさするであろう、ましてや親方様は定めし憎にくいのっそりめと怒おこつてござろう、お吉様はなおさら義理知らずの奴めと恨にくんでござろう、今日は大抵どちらにか任まかすと一言上人様のお定さだめなさるはずとて、今朝出でて行いかれしがまだ歸かへられず、どうか今度の仕事だけはあれほど吾夫は望のぞんで居ゐらるるとも此方こちは分に応こたへず、親方には義理もありかたがた親方の方に上人様の任まかさるればよいと思うような氣持きもちもするし、また親方様の大氣にて別段怒りもなさらずば、吾夫にさせて見事成みじ成就じゆさせたいような氣持きもちもする、ええ氣の揉もめる、どうなることか、とても良人うちにはお任せなさるまいがもしもいよいよ吾夫のすることになつたら、どのようににまあ親方様お吉様の腹立てらるるか知れぬ、ああ心配しんぱに頭腦あたまの痛いたむ、またこれが知れたらば女の要いらぬ無益むだ心配、それゆえいつも身体からだの弱よわいと、有情やさしくて無理な叱言こいを受うくる

であろう、もう止めましょ止めましょ、ああ痛、と薄痘痕のある蒼い顔を蹙めながら即効紙の貼つてある左右の顚顚を、縫い物捨てて両手で圧える女の、齡は二十五六、眼鼻立ちも醜からねど美味きもの食わぬに膩氣少く肌理荒れたる態あわれにて、檻褸衣服にそけ髪ますます悲しき風情なるが、つくづく独り歎ずる時しも、台所の劃りの破れ障子がらりと開けて、母様これを見てくれ、と猪之が云うにびっくりして、汝はいつからそこにいた、と云いながら見れば、四分板六分板の切れ端を積んで現然と真似び建てたる五重塔、思わず母親涙になつて、お好み児ぞと声曇らし、いきなり猪之に抱きつきぬ。

其四

當時に有名の番匠川越の源太が受け負いて作りなしたる谷中感応寺の、どこに一つ批点を打つべきところあろうはずなく、五十疊敷格天井の本堂、橋をあざむく長き廻廊、幾部かの客殿、大和尚が居室、茶室、学徒所化の居るべきところ、庫裡、浴室、玄関まで、あるは莊嚴を尽しあるは堅固を極め、あるは清らかにあるは寂びておのおのそのよろしきに適い、結構少しも申し分なし。そもそも微々たる旧基を振るいてかほどの大寺を成せるは誰ぞ。法諱を聞けばそのころの三歳児も合

掌札拜すべきほど世に知られたる宇陀の朗円上人とて、早くより身延の山に螢雪の苦学を積まれ、中ごろ六十余州に雲水の修行をかさね、毘婆舍那の三行に寂靜の慧剣を礪ぎ、四種の悉檀に済度の法音を響かせられたる七十有余の老和尚、骨は俗界の葷羶を避くるによつて鶴のごとくに痩せ、眼は人世の紛紜に厭きて半ば睡れるがごとく、もとより壞空の理を諦して意欲の火炎を胸に揚げらるることもなく、涅槃の真を会して執着の彩色に心を染まざることもなければ、堂塔を興し伽藍を立てんと望まれしにもあらざれど、徳を慕い風を仰いで寄り来る学徒のいと多くて、それらのものが雨露凌がん便宜も旧のままにてはなくなりしまま、なお少し堂の広くもあれかしなんと独語かれしが根となりて、道徳高き上人の新たに規模を大きくゆうして寺を建てんと云いたまうぞと、このこと八方に伝播れば、中には徒弟の伶俐なるがみずから奮つて四方に馳せ感応寺建立に寄附を勧めて行くもあり、働きたる顔に上人の高徳を演べ説き聞かし富豪を慫慂めて喜捨せしむる信徒もあり、さなきだに平素より随喜渴仰の思いを運べるもの雲霞のごとくにこの勢いをもつてしたれば、上諸侯より下町人まで先を争い財を投じて、我一番に福田へ種子を投じて後の世を安楽くせんと、富者は黄金白銀を貧者は百銅二百銅を分に応じて寄進せしにぞ、百川海に入るごとく瞬瞬間に金銭の驚かるるほど集まりけるが、それより世才に長けた

るものの世話人となり用人となり、万事万端執り行うてやがて立派に成就しけるとは、聞いてさえ小気味のよき話なり。

しかるに悉皆成就の暁、用人頭の為右衛門普請諸入用諸雜費一切しめくり、手脱ることなく決算したるになお大金の剩れるあり。これをばいかなすべきと役僧の円道もろとも、髪ある頭に髪なき頭突き合わせて相談したれど別に殊勝なる分別も出でず、田地を買わんか畠買わんか、田も畠も余るほど寄附のあれば今さらまたこの淨財をそのようなことに費すにも及ばじと思案にあまして、面倒なりよきに計らえと皺枯れたる御声にて云いたまわんは知れてあれど、恐る恐る円道ある時、思さるる用途もやと伺いしに、塔を建てよとただ一言云われしぎり振り向きもしたまわず、鼈甲縁の大きな眼鏡の中より微かなる眼の光りを放たれて、何の経やら論やらを黙々と読み続けられけるが、いよいよ塔の建つに定まって例の源太に、積り書出せと円道が命令けしを、知ってか知らずにか上人様にお目通り願いたしと、のっそりが来しは今より二月ほど前なりし。

其五

紺とはいえど汗に褪め風に化りて異な色になりし上、幾たびか洗い濯がれたるためそれとしも見えず、襟の記印の字さ

え臙げとなりし絆纏を着て、補綴のあたりし古股引をはきたる男の、髪は塵埃に塗れて白け、面は日に焼けて品格なき風采のなおさら品格なきが、うろうろのそのそと感応寺の大門を入りにかかるを、門番尖り声で何者ぞと怪しみ誰何せば、びっくりしてしばらく眼を見張り、ようやく腰を屈めて馬鹿丁寧に、大工の十兵衛と申しまする、御普請につきましてお願いに出ました、とおずおず云う風態の何となく腑には落ちねど、大工とあるに多方源太が弟子かなんぞの使いに來たりしものならんと推察して、通れと一言押柄に許しける。

十兵衛これに力を得て、四方を見廻しながら森厳しき玄関前にさしかかり、お頼申すと二三度いえば鼠衣の青黛頭、可愛らしき小坊主の、おとおと答えて障子引き開けしが、応接に慣れたるものの眼捷く人を見て、敷台までも下りず突っ立ちながら、用事なら庫裡の方へ廻れ、と情なく云い捨てて障子ぴっしやり、後はどこやらの樹頭に啼く鶯の声ばかりして音もなく響きもなし。なるほどと独り言しつつ十兵衛庫裡にまわりてまた案内を請えば、用人為右衛門仔細らしき理屈顔して立ち出で、見なれぬ棟梁殿、いづくより何の用事で見えられた、と衣服の粗末なるにはや侮り軽しめた言葉遣い、十兵衛さらに気にもとめず、野生は大工の十兵衛と申すもの、上人様の御眼にかかりお願いをいたしたいことのあつてまいりました、どうぞお取次ぎ下されまし、と首を低くして頼み

入るに、為右衛門じろりと十兵衛が垢臭き頭上より白の鼻緒の鼠色になった草履はき居る足先まで睨め下し、ならぬ、ならぬ、上人様は俗用にお関わりはなされぬわ、願いというは何か知らねど云うて見よ、次第によりては我が取り計ろうてやる、とさもさも万事心得た用人めかせる才物ぶり。それを無頓着の男の質朴にも突き放して、いえ、ありがとうはござりますれど上人様に直々でのうては、申しても役に立ちませぬこと、どうぞただお取次ぎを願います、と此方の心が醇粹なれば先方の氣に触る言葉とも斟酌せず推し返し言えば、為右衛門腹には我を頼まぬが憎くて愠りを含み、理のわからぬ男じゃの、上人様は汝ごとき職人らに耳は仮したまわぬというに、取り次いでも無益なれば我が計ろうて得せんと、甘く遇えばつけ上る言い分、もはや何もかも聞いてやらぬ、帰れ帰れ、と小人の常態とて語氣たちまち粗暴くなり、膠なく言い捨て立たんとするにあわてし十兵衛、ではござりましようなれど、と半分いう間なく、うるさい、喧しいと打ち消され、奥の方に入られてしもうて茫然と土間に突つ立ったまま掌の裏の螢に脱去られしごとき思いをなしけるが、是非なく声をあげてまた案内を乞うに、口ある人のありやなしや薄寒き大寺の岑閑と、反響のみはわが耳に墮ち来れど咳声一つ聞えず、玄関にまわりてまた頼むといえは、先刻見たる憎げな伶俐小僧のちよつと顔出して、庫裡へ行けと教えたるに、と

独語きて早くも障子ぴしやり。

また庫裡に廻りまた玄関に行き、また玄関に行き庫裡に廻り、ついには遠慮を忘れて本堂にまで響く大声をあげ、頼む頼むお頼申すと叫べば、其声より大きな声を発して馬鹿めと罵りながら為右衛門ずかずかと立ち出で、僮僕どもこの狂漢を門外に引き出せ、騒々しきを嫌いたまう上人様に知れなば、我らがこやつのために叱らるべしとの下知、心得ましたと先刻より僕人部屋に転がりいし寺僕ら立ちかかり引き出さんとする、土間に坐り込んで出されじとする十兵衛。それ手を取れ足を持ち上げよと多勢口々に罵り騒ぐところへ、後園の花二枝三枝剪んで床の眺めにせんと、境内あちこち逍遙されし朗円上人、木蘭色の無垢を着て左の手に女郎花桔梗、右の手に朱塗の把りの鉢持たせられしまま、図らずここに来かかりたまひぬ。

其六

何事に罵り騒ぐぞ、と上人が下したまう鶴の一声のお言葉に群雀の輩鳴りを歇めて、振り上げし拳を蔵すに地なく、禅僧の問答にありやありやと云いかけしまま一喝されて腰の折けたるとき風情なるもあり、捲り縮めたる袖を体裁悪げに下してこそそと人の後ろに隠るるもあり。天を仰げる鼻

の孔より火煙も噴くべき驕慢の怒りに意氣昂ぶりし為右衛門も、少しは慚じてや首をたれ掌を揉みながら、自己が発頭人なるに是非なく、ありし次第をわが田に水引き水引き申し出づれば、瘦せ皺びたる顔に深く長く痕いたる法令の皺溝をひとしお深めて、にったりと徐やかに笑いたまい、婦女のように軽く軟らかな声小さく、それならば騒がずともよいこと、為右衛門汝がただ従順に取り次ぎさえすれば仔細はのうてあらうものを、さあ十兵衛殿とやら老衲について此方へおいで、とんだ気の毒な目に遇わせました、と万人に尊敬い慕わるる人はまた格別の心の行き方、未学を軽んぜず下司をも侮らず、親切に温和しく先に立つて静かに導きたまう後について、迂濶な根性にも慈悲の浸み透れば感涙とどめあえぬ十兵衛、だんだんと赤土のしっとりしたるところ、飛石の画趣に布かれあるところ、梧桐の影深く四方竹の色ゆかしく茂れるところなど縈り繞り過ぎて、小やかなる折戸を入れば、花もこれというはなき小庭のただものさびて、有楽形の燈籠に松の落葉の散りかかり、方星宿の手水鉢に苔の蒸せるが見る眼の塵をも洗うばかりなり。

上人庭下駄脱ぎすてて上にあがり、さあ汝も此方へ、と云いさして掌に持たれし花を早速に釣花活に投げこまるるにぞ、十兵衛なかなか怯めず臆せず、手拭で足はたくほどのことも気のつかぬ男とてなすことなく、草履脱いでつつそりと三疊

台目の茶室に入りこみ、鼻突き合わすまで上人に近づき坐りて黙々と一礼する態は、礼儀に嫻わねど充分に偽飾なき情の真実をあらわし、幾たびかすぐにも云い出でんとしてなお開きかぬる口をようやくに開きて、舌の動きもただとどしく、五重の塔の、御願いに出了たは五重の塔のためでござります、と藪から棒を突き出したように尻もったてて声の調子も不揃いに、辛くも胸にあることを額やら腋の下の汗とともに絞り出せば、上人おもわず笑いを催され、何か知らねど老衲をば怖いものなぞと思わず、遠慮を忘れてゆるりと話をするがよい、庫裡の土間に坐り込もうで動かずにいた様子では、何か深う思い詰めて来たことであろう、さあ遠慮を捨てて急かずに、老衲をば朋友同様におもって話すがい、とあくまで慈しき注意。十兵衛脆くも梟と常々悪口受くる銅鈴眼にはや涙を浮めて、はい、はい、はいありがとうござりまする、思い詰めて参上りました、その五重の塔を、こういう野郎でござりまする、御覧の通り、のっそり十兵衛と口惜しい諱名をつけられて居る奴でござりまする、しかしお上人様、真実でござりまする、工事は下手ではござりませぬ、知っております私しは馬鹿でござりまする、馬鹿にされております、意気地のない奴でござりまする、虚誕はなかなか申しませぬ、お上人様、大工はできます、大隅流は童児の時から、後藤立川二ツの流義も合点致しておりまする、させて、五重塔の仕事を私にさ

せていただきたい、それで参上りました、川越の源太様が積りをしたとは五六日前聞きました、それから私は寝ませぬわ、お上人様、五重塔は百年に一度一生に一度建つものではござりませぬ、恩を受けております源太様の仕事を奪りたくはおもいませぬが、ああ賢い人は羨ましい、一生一度百年一度の好い仕事を源太様はさるる、死んでも立派に名を残さるる、ああ羨ましい羨ましい、大工となって生きている生き甲斐もあらるるというもの、それに引き代えこの十兵衛は、鑿手斧もつては源太様にだとして誰にだとして、打つ墨縄の曲ることはあれ万が一にも後れを取るようなことは必ず必ずないと思えど、年が年中長屋の羽目板の繕いやら馬小屋箱溝の数仕事、天道様が知恵というものを我には賜さらないゆえ仕方がないと諦めて諦めても、拙い奴らが宮を作り堂を受け負い、見るものの眼から見れば建てさせた人が気の毒なほどのものを築造えたを見るたびごとに、内々自分の不運を泣きますわ、お上人様、時々は口惜しくて技倆もない癖に知恵ばかり達者な奴が憎くもなりますわ、お上人様、源太様は羨ましい、知恵も達者なれば手腕も達者、ああ羨ましい仕事をなさるか、我はよ、源太様はよ、情ないこの我はよと、羨ましいがつい高じて女房にも口きかず泣きながら寝ましたその夜のことに、五重塔を汝作れ今すぐつくれと怖ろしい人にいつつけられ、狼狽えて飛び起きさまに道具箱へ手をつ突っ込んだは半分夢で

半分現、眼が全く覚めて見ますれば指の先を鑢鑿につっかけて怪我をしながら道具箱につかまって、いつの間にか夜具の中から出ていたつまらなさ、行燈の前につくねんと坐ってあ情ない、つまらないと思いましたが時のその心持、お上人様、わかりますか、ええ、わかりますか、これだけが誰にでも分ってくれば塔も建てなくてもよいのです、どうせ馬鹿なのっぞり十兵衛は死んでもよいのでござりまする、腰拔鋸のように生きていたくもないのですわ、其夜からというもの、真実、真実でござりまする上人様、晴れて居る空を見ても燈光の達かぬ室の隅の暗いところを見ても、白木造りの五重の塔がぬつと突っ立って私を見下しておりますわ、とうとう自分が造りたい気になって、とても及ばぬとは知りながら、毎日仕事を終るとすぐに夜を籠めて五十分一の雛形をつくり、昨夜でちょうど仕上げました、見に来て下されお上人様、頼まれませぬ仕事はできていたい仕事はできない口惜しさ、ええ不運ほど情ないものはないと私が歎けばお上人様、なまじでぎずば不運も知るまいと女房めが其雛形をば揺り動かしての述懐、無理とは聞えぬだけによけい泣きました、お上人様お慈悲に今度の五重塔は私に建てさせて下され、拝みます、こここの通り、と両手を合わせて頭を疊に、涙は塵を浮べたり。

木彫りの羅漢のように黙々と坐りて、菩提樹の実の珠数繰りながら十兵衛が埒なき述懐に耳を傾け居られし上人、十兵衛が頭を下ぐるを制しとどめて、わかりました、よく合点が行きました、ああ殊勝な心がけを持って居らるる、立派な考えを蓄えていらるる、学徒どもの示しにもしたいような、老衲も思わず涙のこぼれました、五十分一の雛形とやらも是非見にまいりましょう、しかし汝に感服したればとて今すぐに五重の塔の工事を汝に任するわと、軽忽なことを老衲の独断で言うわけにもならねば、これだけは明瞭とことわっておきます、いずれ頼むとも頼まぬともそれは表立って、老衲からではなく感応寺から沙汰をしましょう、ともかくも幸い今日は閑暇のあれば汝が作った雛形を見たし、案内してこれよりすぐに汝が家へ老衲を連れて行てはくれぬか、とすこしも辺幅を飾らぬ人の、義理明らかに言葉渋滞なく云いたまえば、十兵衛満面に笑みを含みつつ米春くごとくむやみに頭を下げて、はい、はい、はいと答えおりしが、願いをお取り上げ下されましたか、ああありがとうござりまする、野生の宅へおいで下さりますと、ああもったいない、雛形はじきに野生めが持つてまいりまする、御免下され、と云いさまさすがののっ所りも喜悦に狂して平素には似ず、大げさに一つぽっく

りと礼をばするや否や、飛石に蹴躑きながら駈け出してわが家に帰り、帰ったと一言女房にも云わず、いきなりに雛形持ち出して人を頼み、一人して息せき急ぎ感応寺へと持ち込み、上人が前にさし置きて帰りけるが、上人これを熟視たまうに、初重より五重までの配合、屋根底廂の勾配、腰の高さ、椽木の割賦、九輪請花露盤宝珠の体裁までどこに可厭なところもなく、水際立つたる細工ぶり、これがあの不器用らしき男の手にてできたものかと疑わるるほど巧緻なれば、独りひそかに歎じたまいて、かほどの技倆をもちながら空しく埋もれ、名を発せず世を経るものもあることか、傍眼にさえも気の毒なるを当人の身となりてはいかに口惜しきことならん、あわれかかるものに成るべきならば功名を得させて、多年抱ける心願に負かざらしめたし、草木とともに朽ちて行く人の身はもとより因縁仮和合、よしや惜しむとも惜しみて甲斐なく止めて止まらねど、たとえば木匠の道は小なるにせよそれに一心の誠を委ね生命をかけて、欲も大概は忘れ卑劣き念も起さず、ただただ鑿をもつてはよく穿らんことを思い、鉋を持つてはよく削らんことを思う心の尊さは金にも銀にも比えがたきを、わずかに残す便宜もなくしていたずらに北郎の土に没め、冥途の苞と齎し去らしめんこと思えば惘然至極なり、良馬主を得ざるの悲しみ、高士世に容れられざるの恨みも詮ずるところは異なることなし、よしよし、我図らずも十兵衛が

胸に懐ける無価の宝珠の微光を認めしこそ縁なれ、こたびの工事を彼に命け、せめては少しの報酬をば彼が誠実の心に得させんと思われけるが、ふと思ひよりたまえば川越の源太もこの工事をことのほかに望める上、彼には本堂庫裏客殿作らせし因みもあり、しかも設計予算まではや做し出してわが眼に入れしも四五日前なり、手腕は彼とて鈍きにあらず、人の信用ははるかに十兵衛に超えたり。一ツの工事に二人の番匠、これにもさせたし彼にもさせたし、いずれにせんと上人もさすがこれには迷われける。

其八

明日辰の刻ごろまでに自身当寺へ来たるべし、かねてその方工事仰せつけられたきむね願いたる五重塔の儀につき、上人直接にお話示あるべきよしなれば、衣服等失礼なきよう心得て出頭せよと、厳格に口上を演ぶるは弁舌自慢の円珍とて、唐辛子をむざと嗜み食える祟り鼻の頭にあらわれたる滑稽納所。平日ならば南蛮和尚といえる譚名を呼びて戯談口さき合うべき間なれど、本堂建立中朝夕顔を見しよりおのずと狎れし馴染みも今は薄くなりたる上、使僧らしゅう威儀をつくらいて、人さし指中指の二本でややもすれば兜背形の頭顱の頂上を搔く癖ある手をも法衣の袖に殊勝くさく隠蔽し居る

に、源太も敬い謹んで承知の旨を頭下げつつ答えけるが、如才なきお吉はわが夫をかかる俗僧にまでよく評わせんとてか帰り際に、出したままにして行く茶菓子とともに幾干銭か包み込み、是非にというて取らせけるは、思えばけしからぬ布施のしようなり。円珍十兵衛が家にも詣りて同じことを演べ帰りけるが、さてその翌日となれば源太は鬚剃り月代して衣服をあらため、今日こそは上人のみずから我に御用仰せつけらるるなれば勢い込んで、庫裏より通り、とある一ト間に待たされて坐を正しくし扣えける。

態こそ異れ十兵衛も心は同じ張りもち、導かるるまま打ち通りて、人気のなきに寒さ湧く一室の中にただ一人兀然として、今や上人の招びたまうか、五重の塔の工事一切汝に任すと命令たまうか、もしまた我には命じたまわす源太に任すと定めたまいしを我にことわるため招ばれしか、そうにもあらば何とせん、浮むよしなき埋れ木のわが身の末に花咲かん頼みも永くなくなるべし、ただ願わくは上人のわが愚かしきを憐れみて我に命令たまわんことをと、九尺二枚の唐襖に金鳳銀鳳翔り舞うその箔模様の美しきも眼に止めずして、茫々と暗路に物を探ることく念想を空に漂わすことやや久しきところへ、例の伶俐げな小僧いで来たりて、方丈さまの召しますほどにこちらへおいでなされまし、と先に立って案内すれば、すわや願望のかなうともかなわざるとも定まる時ぞと魯鈍

の男も胸を騒がせ、導かるるまま随いて一室の中へずっと入る、途端にこなたをぎろりつと見る眼鏡く怒りを含んで斜めに睨むは思いがけなき源太にて、座に上人の影もなし。事の意外に十兵衛も足踏みとめて突つ立ったるまま一言もなく白眼合ひしが、是非なく畳二ひらばかりを隔てしところにようやく坐り、力なげ首悄然と己れが膝に氣勢のなきたそうなる眼を注ぎ居るに引き替え、源太郎は小狗を瞰下す猛鷲の風に臨んで千尺の巖の上に立つ風情、腹に十分の強みを抱きて、背をも屈指ねば肩をも歪めず、すっきり端然と構えたる風姿といひ面貌といひ水際立ったる男振り、万人が万人とも好かずには居られまじき天晴れ小気味のよき好漢なり。

されども世俗の見解には墮ちぬ心の明鏡に照らしてかれこれともに愛し、表面の美醜に露泥まれざる上人のかえつていずれをともし昨日までは扱ひかねられしが、思いつかるることのありてか今日はわざわざ二人を招び出されて一室に待たせおかれしが、今しも静々居間を出でられ、畳踏まるる足も軽く、先に立ったる小僧が襖明くる後より、すつと入りにて座につきたまえば、二人は恭い敬みてともに齊しく頭を下げ、しばらく上げも得せざりしが、ああいじらしや十兵衛が辛くも上げし面には、まだ世馴れざる里の子の貴人の前に出でしように羞を含みて紅潮し、額の皺の幾条の溝には沁出し熱汗を湛え、鼻の頭にも珠を湧かせば腋の下には雨なるべし。膝

におきたる骨太の掌指は枯れたる松が枝ごとき岩畳作りにありながら、一本ごとにそれさえもわなわな顫えて一心にただ上人の一言を一期の大事と待つ笑止さ。

源太も黙して言葉なく耳を澄まして命を待つ、どちらをどちらと判けかねる、二人の情を汲みて知る上人もまたなかなか口を開かん便宜なく、しばしは静まりかえられしが、源太十兵衛ともに聞け、今度建つべき五重塔はただ一ツにて建てんというは汝たち二人、二人の願いを双方とも聞き届けてはやりたけれど、それはもとよりかないがたく、一人に任さば一人の歎き、誰に定めて命けんという標準のあるではなし、役僧用人らの分別にも及ばねば老僧が分別にも及ばぬほどに、この分別は汝たちの相談に任す、老僧は関わぬ、汝たちの相談の纏まりたる通り取り上げてやるべければ、よく家に帰って相談して来よ、老僧が云うべきことはこれぎりじやによってそう心得て帰るがよいぞ、さあしかと云い渡したぞ、もはや帰ってもよい、しかし今日は老僧も閑暇で退屈なれば茶話しの相手になつてしばらくいてくれ、浮世の噂なんど老納に聞かせてくれぬか、その代り老僧も古い話しのおかしなを二ツ三ツ昨日見出したを話して聞かそう、と笑顔やさしく、朋友かなんぞのように二人をあしろうて、さて何事を云い出さるるやら。

其九

小僧^{こぼうず}がもつて来し茶を上人みずから汲みたまいてすすめるれば、二人とももったいながりて恐れ入りながら頂戴するを、そう遠慮されては言葉に角が取れいで話が丸う行かぬわ、さあ菓子も挟^{はさ}んではやらぬから勝手に摘^{つま}んでくれ、と高坏^{たかつき}推しやりてみずからも天目取り上げ喉^{のど}を湿^{うる}したまい、面白い話というも桑門^{そうもん}の老僧^{らうそう}らにはそうたくさんないものながら、このごろ読んだお経^{うけ}の中につくづくなるほどと感心したことのある、聞いてくれこういう話しじゃ、むかしある国の長者^{ちやうじやう}が二人の子を引きつれてうらかな天氣^{てんき}の節^{ふし}に、香^かりのする花の咲き軟らかな草^{くさ}の滋^{しげ}つて居る広野^{ひろの}を愉快^{たのし}げに遊行^{ゆぎやう}したところ、水は大分に夏の初めゆえ涸^{かわ}れたれどなお清らかに流れて岸を洗うて居る大きな川に出で逢うた、その川の中には珠のような小磧^{こいし}やら銀のような砂でできて居る美しい洲^すのあったれば、長者は興に乗じて一尋^{ひとひろ}ばかりの流れを無造作に飛び越え、あなたこなたを見廻せば、洲の後面^{うしろ}の方もまた一尋ほどの流れで陸^{おか}と隔てられたる別世界、まるで浮世のなまぐさい土地^{つち}とは懸絶^{かけはな}れた清浄^{しょうじやう}の地であつたまま独り^{ひとり}飲^ひび喜んで踊躍^{ゆやく}したが、渉^{わた}ろうとしても渉り得ない二人の児童^{こども}が羨ましがって喚^よび叫^よぶを可憐^{かわれ}に思い、汝^{そなた}たちには来ることのできぬ清浄の地であるが、さほどに来たくば渡らしてやるほどに待

つていよ、見よ見よわが足下^{あしもと}のこの磧^{いし}は一々蓮華^{れんげ}の形状^{かたち}をなし居る世に珍しき磧なり、わが眼の前のこの砂は一々五金の光をもてる比類^{たぐい}まれなる砂なるぞと説き示せば、二人は遠眼にそれを見ていよいよ焦躁^{あせ}り渡ろうとするを、長者は徐^{しず}かに制しながら、洪水^{おほみづ}の時にても根こぎになつたるらしき棕櫚^{しゆろ}の樹の一尋余りなを架^かけ渡して橋としてやつたに、我が先へ汝は後にと兄弟争^{せめ}い闘^ういだ末、兄は兄だけ力強く弟^{おとこ}をついに投げ伏せて我意^がの勝を得たに誇り高ぶり、急ぎその橋を渡りかけ半途^{なかば}にようやく到^{いた}りし時、弟は起き上りさま口惜しさに力を籠^こめて橋をうごかせば兄はたちまち水に落ち、苦しみ跳^もぐいて洲に達せしが、この時弟ははやその橋を難なく渡り超えかくるを見るより兄もその橋の端を一揺り揺り動かせば、もとより丸木の橋なるゆえ弟も堪^{たま}らず水に落ち、わずかに長者の立つたところへ濡^ぬれ滴^{した}りて這^はい上つた、その時長者は歎息して、汝たちには何と見ゆる、今汝らが足踏みかけしよりの洲はたちまち前と異なり、磧は黒く醜^{みにく}くなり沙^{すな}は黄ばめる普通の沙となれり、見よ見よいかにと告げ知らするに二人は驚^{おどろ}き、眼^{まなこ}を睜^{みは}りて見れば全く父の言葉に少しも違^{たが}わぬ沙磧^{すなごいし}、ああかかるもの取らんとて可愛き弟を悩^{なや}ませしか、尊^{たつと}き兄を溺^{おほ}らせしかと兄弟ともに慚^はじ悲しみて、弟の袂^{たもと}を兄は絞^{しぼ}り兄の衣裾^{もすそ}を弟は絞^{しぼ}りて互いにいたわり慰めけるが、かの橋をまたた引き来たりて洲の後面^{うしろ}なる流れに打ちかけ、はやこの洲に

は用なければなおもあなたに遊び歩かん、汝たちまずこれを渡れと、長者の言葉に兄弟は顔を見合いて先刻には似ず、兄上先にお渡りなされ、弟よ先に渡るがよいと譲り合いしが、年順なれば兄まず渡るその時に、転びやすきを氣遣いて弟は端を揺がぬようしかと抑ゆる、その次に弟渡れば兄もまた揺がぬように抑えやり、長者は苦なく飛び越えて、三人ともにいと長閑くそぞろに歩むそのうちに、兄が図らず拾いし石を弟が見れば美しき蓮華の形をなせる石、弟が摘み上げたる砂を兄が覗けば眼も眩く五金の光を放ちていたるに、兄弟ともども歡喜び楽しみ、互いに得たる幸福を互いに深く讚歎し合う、その時長者は懷中より真実の壁の蓮華を取り出し兄に与えて、弟にも真実の砂金を袖より出して大切にせよと与えたという、話してしまえば小供欺しのようじゃが仏説に虚言はない、小兒欺しでは決してない、噛みしめて見よ味のある話ではないか、どうじゃ汝たちにも面白いか、老僧には大層面白いが、と軽く云われて深く浸む、譬喩方便も御胸の中にもたるる真実から。源太十兵衛二人とも顔見合わせて茫然たり。

其十

感応寺よりの帰り道、半分は死んだようになって十兵衛、

どんつく布子の袖組み合わせ、腕拱きつつうかうか歩き、お上人様のあおおっしゃったはどちらか一方おとなしく譲れと諭しの謎々とは、何ほど愚鈍な我にも知れたが、ああ譲りたくないものじゃ、せっかく丹誠に丹誠凝らして、定めし冷えて寒かろうにお寝みなされと親切でしてくる女房の世話までを、黙つていよよいなと叱り飛ばして夜の眼も合わさず、工夫に工夫を積み重ね、今度という今度は一世一代、腕一杯の物を建てたら死んでも恨みはないとまで思い込んだに、悲しや上人様の今日のお諭し、道理には違いないそうもなければならぬことじゃが、これを譲つていつまた五重塔の建つとあていう的のあるではなし、一生とてもこの十兵衛は世に出ることのならぬ身か、ああ情ない恨めしい、天道様が恨めしい、尊い上人様のお慈悲は充分わかっていて露ばかりもありがとうなくは思わぬが、ああどうにもこうにもならぬことじゃ、相手は恩のある源太親方、それに恨みの向けようもなし、どうしてもこうしても温順に此方の身を退くよりほかに思案も何もないか、ああないか、というて今さら残念な、なまじこのようなことおもいたたずに、のっそりだけで済ましていたらばこのように残念な苦惱もすまいものを、分際忘れた我が悪かった、ああ我が悪い、我が悪い、けれども、ええ、けれども、ええ、思うまい思うまい、十兵衛がのっそりで浮世の伶俐な人たちの物笑いになってしまえばそれで済むのじゃ、連れ

添う女房にまでも内々活用の利かぬ夫じやと唧たれながら、夢のように生きて夢のように死んでしまえばそれで済むこと、あきらめて見れば情ない、つくづく世間がつまらない、あんまり世間が酷過ぎる、と思うのもやっぱり愚痴か、愚痴か知らねど情な過ぎるが、言わず語らず諭された上人様のあの言葉の真実のところを味わえば、あくまでお慈悲の深いのが五臓六腑に浸み透って未練な愚痴の出端もないわけ、争う二人をどちらにも傷つかぬよう捌きたまい、末の末までもにやかれと兄弟の子に事寄せて尚いお経を解きほぐして、噛んで含めて下さったあのお話に比べて見ればもとより我は弟の身、ひとしお他に譲らねば人間らしくもないものになる、ああ弟とは辛いものじやと、路も見分かで屈托の眼は涙に曇りつつ、とぼとぼとして何一ツ愉快もなきわが家の方に、糸で曳かるる木偶のように我を忘れて行く途中、この馬鹿野郎発狂漢め、我のせつかく洗ったものに何する、馬鹿めとだしぬけに噛みつくごとく罵られ、癪張声に胆を冷やしてハツと思えばぐわらり顛倒、手桶枕に立てかけありし張物板に、我知らず一足二足踏みかけて踏み覆したる不体裁さ。

尻餅ついて驚くところを、狐憑きめ忌々しい、と駄力ばかりは近江のお兼、顔は子供の福笑戯に眼をつけ歪めた多福面のごとき房州出らしき下婢の憤怒、拳を挙げて丁と打ち猿臂を伸ばして突き飛ばせば、十兵衛堪らず汚塵に塗れ、はいは

い、狐に誑まれました御免なされ、と云いながら悪口雑言聞き捨てに痛さを忍びて逃げ走り、ようやくわが家に帰りつけば、おとお帰りか、遅いのでどういふことかと案じていました、まあ塵埃まぶれになってどうなされました、と払いにかかるを、構うなと言、気のなさそうな声で打ち消す。その顔を覗き込む女房の真実心配そうなを見て、何か知らず無性に悲しくなつてじつと湿みのさしくる眼、自分で自分を叱るように、ええと図らず声を出し、煙草を捻って何気なくもてなすことはもてなすものの言葉もなし。平時に変わる状態を大方それと推察してさて慰むる便もなく、問うてよきやら問わぬがよきやら心にかかる今日の首尾をも、口には出して尋ね得ぬ女房は胸を痛めつつ、その一本は杉箸で辛くも用を足す火箸に挟んで添える消炭の、あわれ甲斐なき火力を頼り土瓶の茶をば温むるところへ、遊びに出たる猪之の戻りて、やあ父様帰って来たな、父様も建てるか坊も建てたぞ、これ見てくれ、とさも勇ましく障子を明けて褒められたさが一杯に罪なくにこりと笑いながら、指さし示す塔の模形。母は襦袢の袖を噛み声も得たてず泣き出せば、十兵衛涙に浮くばかりの円の眼を剥き出し、まじろぎもせでぐいと睨めしが、おおかしたでかした、よくできた、褒美をやろう、ハッハハハと咽び笑いの声高く屋の棟にまで響かせしが、そのまま頭を天に対わし、ああ、弟とは辛いなあ。

格子開くる響き爽やかなること常のごとく、お吉、今帰った、と元気よげに上り来たる夫の声を聞くより、心配を輪に吹き吹き吸うていし煙草管を邪見至極に抛り出して忙わしく立ち迎え、大層遅かったではないか、と云いつつ背面へ廻つて羽織を脱がせ、立ちながら腮に手伝わせての袖畳み小早く室隅の方にそのままさし置き、火鉢の傍へすぐまた戻つてたちまち鉄瓶に松虫の音を発させ、むずと大胡坐かき込み居る男の顔をちよつと見しなに、日は暖かでも風が冷たく途中は随分寒ましたろ、一瓶煖酒ましょか、と痒いところへよく届かす手は口をきくその間に、がたぴしさせず膳ごしらえ、三輪漬は柚の香ゆかしく、大根卸で食わする鮭卵は無造作にして気が利きたり。

源太胸には苦慮あれども幾らかこれに慰められて、猪口把りさまに二三杯、後一杯を漫く飲んで、汝も飲れと与うれば、お吉一口、つけて、置き、焼きかけの海苔畳み折つて、追っつけ三子の来そうなもの、と魚屋の名を独り語しつ、猪口を返して酌せし後、上々吉と腹に思えば動かす舌も滑らかに、それはそうと今日の首尾は、大丈夫此方のものとは極めていいても、知らせて下さらぬうちは無益な苦勞を妾はします、お

上人様は何と仰せか、またのっそりめはどうなったか、そう真面目顔でむつとりとして居られては心配で心配でなりませぬ、と云われて源太は高笑い。案じてもらうことはない、お慈悲の深い上人様はどの道我を好漢にして下さるのよ、ハハハ、なあお吉、弟を可愛がればいい兄きではないか、腹の饑餓したものには自分が少しは辛くても飯を分けてやらねばならぬ場合もある、他の怖いことは一厘ないが強いばかりが男児ではないなあ、ハハハ、じつと堪忍して無理に弱くなるのも男児だ、ああ立派な男児だ、五重塔は名譽の工事、ただ我一人でももの見事に千年壊れぬ名物を万人の眼に残したいが、他の手も知恵も寸分交ぜず川越の源太が手腕だけで遺したいが、ああ癩癩を堪忍するのが、ええ、男児だ、男児だ、なるほどいい男児だ、上人様に虚言はない、せっかく望みをかけた工事を半分他にくれるのはつくづく忌々しけれど、ああ、辛い、ええ兄きだ、ハハハ、お吉、我はのっそりに半口やうて二人で塔を建てようとおもうわ、立派な弱い男児か、賞めてくれ賞めてくれ、汝にでも賞めてもらわなくてはあまり張合いのない話した、ハハハと嬉しそうな顔もせで意味のない声ばかりはずませて笑えば、お吉は夫の気を量りかね、上人様が何とおっしゃったか知らぬが妾にはさっぱり分らずちっとも面白くない話し、唐偏朴のあののっそりめに半口やるとはどういうわけ、日ごろの気性にも似合わない、やるもの

ならば未練氣なしにすっかりやってしまふが好いし、もとより此方で取るはずなれば要りもせぬ助太刀頼んで、一人の首を二人で切るような卑劣なことをするにも当らないではありませぬか、冷水で洗ったような清潔な腹をもつて居ると他にも云われ自分でも常々云うていた汝が、今日に限って何という煮えきれない分別、女の妾から見ても意地の足らないぐずぐず思案、賞めませぬ賞めませぬ、どうしてなかなか賞められませぬ、高が相手は此方の恩を受けて居るのつそりめ、一体ならば此方の仕事を先潜りする太い奴と高飛車に叱りつけて、ぐうの音も出させぬようにすればなるのつそりめを、そう甘やかして胸の焼ける連名工事をなんでするに当るはずのあろうぞ、甘いばかりが立派のことか、弱いばかりが好い男児か、妾の虫には受け取れませぬ、なんなら妾が一ト走りのつそりめのところに行つて、重々恐れ入りましたと思ひ切らせて謝罪らせて両手を突かせて来ましようか、と女賢しき夫思い。源太は聞いて冷笑い、何が汝にわかるものか、我のすることを好いとおもうていてさえくるればそれでよいのよ。

其十二

色も香もなく一言に黙つていよとやり込められて、聴かぬ気のお吉顔ふり上げ何か云い出したげなりしが、自己よりは

一倍きかぬ氣の夫の制するものを、押し返して何ほど云うとも機嫌を損ずることこそはあれ、口答えの甲斐は露なきを経験あつて知り居れば、連れ添うものに心の奥を語り明かして相談かけざる夫を恨めしくはおもいながら、そこは伶俐の女の分別早く、何も妾が遮つて女の癖に要らざる嘴を出すではなけれど、つい氣にかかる仕事の話しゆえ思はず様子の聞きたくて、よけいなことも胸の狭いだけに饒舌ったわけ、と自分が真実籠めし言葉をわざとごくごく軽うしてしもうて、どこまでも夫の分別に従うよう表面を粧うも、幾らか夫の腹の底にある煩悶を殺いでやりたさよりの真実。源太もこれに角張りかかった顔をやわらげ、何ごととも皆天運じゃ、此方の見ええ温順に和しくもつていたならまた好いことの廻つて来ようと、こうおもつて見ればのつそりに半口やるもかえつて好い心持、世間は氣次第で忌々しくも面白くもなるものゆえ、できるだけは卑劣な鑄を根性に着けず瀟洒と世を奇麗に渡りさえすればそれで好いわ、と云いさしてぐいと仰飲ぎ、後は芝居の噂やら弟子どもが行状の噂、真に罪なき雑話を下物に酒も過ぎぬほど心よく飲んで、下卑た体裁ではあれどとり膳睦まじく飯を喫了り、多方もう十兵衛が来そうなもの何事もせず待ちかくるに、時は空しく経過て障子の日晷一尺動けどなのお見え、二尺も移れどなのお見え。

是非先方より頭を低くし身を縮めて此方へ相談に来たり、

何とぞ半分なりと仕事をわけて下されと、今日の上人様のお慈愛深きお言葉を頼りに泣きついても頼みをかけべきに、何としてこうは遅きや、思いあきらめて望みを捨て、もはや相談にも及ばずとて独りわが家に燻り居るか、それともまた此方より行くを待つて居るか、もしも此方の行くを待つて居るということならばあまり増長した見なれど、まさかにそのような高慢気も出すまじ、例ののっそりで悠長に構えて居るだけのことならんが、さても気の長い男め迂濶にもほどのあれと、煙草ばかりいたずらに喫かして、待つには短き日も随分長かりしに、それさえ暮れて群鳥埒に帰るころとなれば、さすがに心おもしろからずようやく癩癧の起り起りて耐えきれずなりし潮先、据えられし晩食の膳に對うとそのまま云いわけばかりに箸をつけて茶さえゆるりとは飲まず、お吉、十兵衛めがところちよつと行て来る、行違ひになつて不在へ来ば待たしておけ、と云う言葉さえとげとげしく怒りを含んで立ち出でかかれば、気にはかかれど何とせん方もなく、女房は送つて出したる後にて、ただ溜息をするのみなり。

其十三

洪つて開きかぬる雨戸にひとしお源太は癩癧の火の手を亢らせつつ、力まかせにがちがち引き退け、十兵衛家にか、と

云いさまにつとはいれば、声色知つたるお浪早くもそれと悟つて、恩あるその人の敵に今は立ち居る十兵衛に連れ添える身の面を對すこと辛く、女気の纖弱くも胸をどきつかせながら、まあ親方様、とただ一言我知らず云い出したるぎり挨拶さえどぎまぎして急には二の句の出ざるうち、煤けし紙に針の孔、油染みなんど多き行燈の小蔭に悄然と坐り込める十兵衛を見かけて源太にずっと通られ、あわてて火鉢の前に請ずる機転の遲鈍も、正直ばかりで世態を知悉まぬ姿なるべし。

十兵衛は不束に一礼して重げに口を開き、明日の朝参上ろうとおもうておりました、といえはじろりとその顔下眼に睨み、わざと泰然たる源太、おお、そういう其方のつもりであったか、こつちは例の氣短ゆえ今しがたまで待つていたが、いつになつて汝の来るか知れたことではないとして出かけて来ただけ馬鹿であつたか、ハハハ、しかし十兵衛、汝は今日の上人様のあのお言葉をなんと聞いたか、兩人でよくよく相談して来よと云われた揚句に長者の二人の児のお話し、それでわざわざ相談に来たが汝も大抵分別はもう定めて居るであらう、我も随分虫持ちだが悟つて見ればあの譬諭の通り、尖りあうのは互いにつまらぬこと、まんざら敵同士でもないに身勝手ばかりは我も云わぬ、つまりは和熟した決定のところ欲しいゆえに、我欲は充分折つて推いて思案を凝らして来たものの、なお汝の了見も腹藏のないところを聞きたく、そ

の上にまたどうともしようと、我も男児なりや汚い謀計を腹には持たぬ、真実にこうおもつて来たわ、と言葉をしばしとどめて十兵衛が顔を見るに、俯伏いたままだはい、はいと答うるのみにて、乱鬢の中に五六本の白髪が瞬く燈火の光を受けてちりちりと見ゆるばかり。お浪ははや寝し猪の助が枕の方について坐つて、呼吸さえせぬようこれもまた静まりかえり居る淋しさ。かえつて遠くに売りあるく鍋焼饅頭の呼び声の、幽かに外方より家の中に浸みこみ来たるほどなりけり。

源太はいよいよ氣を静め、語氣なだらかに説き出すは、まあ遠慮もなく外見もつくらず我の方から打ち明けようが、なんと十兵衛こうしてはくれぬか、せっかく汝も望みをかけ天晴れ名譽の仕事をして持ったる腕の光をあらわし、欲徳ではない職人の本望を見事に遂げて、末代に十兵衛という男が意匠ぶり細工ぶりこれ視て知れと残そうつもりであろうが、察しもつこう我とてもそれは同じこと、さらにあるべき普請ではなし、取り外つては一生にまた出逢うことはおぼつかないなれば、源太は源太で我が意匠ぶり細工ぶりを是非遺したいは、理屈を自分のためにつけて云えば我はまあ感応寺の出入り、汝はなんの縁もないなり、我は先口、汝は後なり、我は頼まれて設計までしたに汝は頼まれせず、他の口から云うたらばまた我は受け負うても相応、汝が身柄では不相応と誰しも

難をするであろう、だとして我が今理屈を味方にするでもない、世間を味方にするでもない、汝が手腕のありながら不幸せで居るといふも知つて居る、汝が平素薄命を口へこそ出さね、腹の底ではどのくらい泣いて居るといふも知つて居る、我を汝の身にしては堪忍のできぬほど悲しい一生というも知つて居る、それゆえにこそ去年一昨年なんにもならぬことではあるが、まあできるだけの世話はしたつもり、しかし恩に被せるとおもつてくれるな、上人様だとして汝の清潔な腹の中をお洞察になつたればこそ、汝の薄命を氣の毒とおもわれたればこそ今日のようなお諭し、我も汝が欲かなんぞで対岸にまわる奴ならば、私の仕事に邪魔を入れる猪口才な死節野郎と一針に脳天打つ欠かずにはおかぬが、つくづく汝の身を察すればいっそ仕事もくれたいような氣のするほど、というて我も欲は捨て断れぬ、仕事は真実どうあつてもしたいわ、そこで十兵衛、聞いてももらいにくく云うても退けにくい相談じやが、まあこうじや、堪忍して承知してくれ、五重塔は二人で建ちよう、我を主にして汝不足でもあろうが副になつて力を仮してはくれまいか、不足ではあろうが、まあ厭でもあるうが源太が頼む、聴いてはくれまいか、頼む頼む、頼むのじや、黙つて居るのは聴いてくれぬか、お浪さんも私の云うことのわかつたならどうぞ口を副えて聴いてもらつては下さらぬか、と脆くも涙になりいる女房にまで頼めば、お、お、親

方様、ええありがとうござりまする、どこにこのような御親切の相談かけて下さる方のまたあろうか、なぜお礼をば云われぬか、と左の袖は露時雨、涙に重くなしながら、夫の膝を右の手で揺り動かしつ掻き口説けど、先刻より無言の仏となりし十兵衛何ともなお言わず、再度三度かきくどけど黙黙としてなお言わざりしが、やがて垂れたる首を上げ、どうも十兵衛それは厭でござりまする、と無愛想に放つ一言、吐胸について驚く女房。なんと、と一声烈しく鋭く、頸首反らす一二寸、眼に角たててのっそりをまっ向よりして瞰下す源太。

其十四

人情の花も失くさず義理の幹もしっかり立てて、普通のものにはできざるべき親切の相談を、一方ならぬ実意のあればこそ源太のかけてくれしに、いかに伐って抛げ出したような性質がさする返答なればとて、十兵衛厭でござりまするとはあまりなる挨拶、他の情愛のまるでわからぬ土人形でもこうは云うまじきを、さりとては恨めしいほど没義道な、口惜しいほど無分別な、どうすればのように無茶なる夫の了見と、お浪は呆れもし驚きもしわが身の急に絞木にかけて絞めらるるごとき心地のして、思わず知らず夫にすり寄り、それはまあなんとということ、親方様があれほどにあなたこなたのため

を計って、見るかげもないこの方連れ、云わば一ト足に蹴落しておしまいなさることもなさらばできるこの方連れに、大抵ではないお情をかけて下され、御自分一人でなさりたい仕事をも分けてやろう半口乗せてくりようと、身に浸みるほどありがたい御親切の御相談、しかもお招喚にでもなつてで何か、坐蒲団さえあげることのならぬこのようなところへわざわざおいでになつてのお話し、それを無にしてみたいない、十兵衛厭でござりまするとは冥利の尽きた我儘勝手、親方様の御親切の分らぬはずはなかりうに胴欲なも無遠慮なも大方程度のあつたもの、これこの妾の今着て居るのも去年の冬の取りつきに恰姿の寒げなを気の毒がられてお吉様の、縫直して着よと下されたのとは汝の眼には睨らぬか、一方ならぬ御恩を受けていながら親方様の対岸へ廻るさえあるに、それを小癩なとも恩知らずなともおっしゃらず、どこまでも弱い者を愛護うて下さるお仁慈深い御分別にも頼り縋らいて一概に厭じゃとは、たとえば真底から厭にせよ記憶のある人間の口から出せた言葉でござりまするか、親方様の手前お吉様の所思をもよくとつくりと考えて見て下され、妾はもはやこれから先どの顔さげてあつかましくお吉様のお眼にかかるとこのなるものぞ、親方様はお胸の広うて、ああ十兵衛夫婦はわけの分らぬ愚か者なりや是も非もないと、そのまま何とも思しめされずただ打ち捨てて下さるか知らねど、世間は

汝を何と云おう、恩知らずめ義理知らずめ、人情解せぬ畜生め、あれ奴は犬じゃ烏じゃと万人の指甲に弾かれものとなるは必定、犬や烏と身をなして仕事をしたとて何の功名、欲をかわくなく齷齪するなど常々妾に諭された自分の言葉に對しても恥かしゅうはおもわれぬか、どうぞ柔順に親方様の御異見について下さりませ、天に聳ゆる生雲塔は誰々二人で作ったと、親方様ともろともに肩を並べて世に称わるれば、汝の苦勞の甲斐も立ち親方様のありがたいお芳志も知るる道理、妾もどのように嬉しかるか喜ばしかるか、もしそうなれば不足というは薬にしたくもないはずなるに、汝は天魔に魅られてそれをまだまだ不足じゃとおもわるのか、ああ情ない、妾が云わずと知れている汝自身の身のほどを、身の分際を忘れてか、と泣き声になり掻き口説く女房の頭は低く垂れて、鬢にさされし縫針の孔が啣えし一条の糸ゆらゆらと振うにも、千々に碎くる心の態の知られていとどいじらしきに、眼を瞑ぎいし十兵衛は、その時例の濁声出し、喧しいわお浪、黙つていよ、我の話しの邪魔になる、親方様聞いて下され。

其十五

思いの中に激すればや、じたじたと慄い出す膝の頭をしつかと寄せ合わせて、その上に両手突つ張り、身を固くして十

兵衛は、情ない親方様、二人でしようとは情ない、十兵衛に半分仕事を譲つて下さりようとはお慈悲のようで情ない、厭でござります、厭でござります、塔の建てたいは山々でももう十兵衛は断念めております、お上人様のお諭しを聞いてからの帰り道すっぱり思いあきらめました、身のほどにもない考えを持ったが間違ひ、ああ私が馬鹿でござりました、のっそりはどこまでものっそりで馬鹿にさえなつて居ればそれでよいわけ、溝板でもたたいて一生を終りましょう、親方様堪忍して下され我が悪い、塔を建ちようとはもう申しませぬ、見ず知らずの他の人ではなし御恩になった親方様の、一人で立派に建てらるるをよそながら視て喜びましょう、と元氣なげに云い出づるを走り氣の源太ゆるりとは聴いていず、ずいと身を進めて、馬鹿を云え十兵衛、あまり道理が分らな過ぎる、上人様のお諭しは汝一人に聴けというてなされたではない我が耳にも入れられたは、汝の腹でも聞いたならば我の胸でも受け取つた、汝一人に重石を背負つてそう沈まれてしもうては源太が男になれるかやい、つまらぬ思案に身を退いて馬鹿にさえなつて居ればよいとは、分別が摺実過ぎて至当とは云われまいぞ、おおそうならば我がすると得たりかしこで引き受けては、上人様にも恥かしく第一源太がせっかく磨いた俠氣もそこで廃つてしまふし、汝はもとより蛇蜂取らず、知恵のないにもほどのあるもの、そしては二人が何よかろう、

さあそれゆえに美しく二人で仕事をしようというに、少しは
気まずいところがあってもそれはお互い、汝が不足なほどに
こっちにも面白くないのあるは知れきったことなれば、双方
忍耐^{がまん}しあうとして忍耐のできぬわけではないはず、何もわざわざ
骨を折って汝が馬鹿になつてしまひ、幾日の心配を煙と消^き
やし天晴れな手腕^{うで}を寝せ殺しにするにも当らない、のう十兵
衛、我の云うのが腑に落ちたら思案をがらりとし変えてくれ、
源太は無理は云わぬつもりだ、これさなせ黙つて居る、不足
か不承知か、承知してはくれないか、ええ我の了見をまだ呑
み込んでくれないか、十兵衛、あんまり情ないではないか、
何とか云うてくれ、不承知か不承知か、ええ情ない、黙つて
居られてはわからない、我の云うのが不道理か、それとも不
足で腹立ててか、と義には強くて情には弱く意地も立つれば
親切も飽くまで徹^{とお}す江戸ツ子腹の、源太は柔和^{やさし}く問いかくれ
ば、聞き居るお浪は嬉しさの骨身に浸みて、親方様ああり
がとうござりますると口には出さねど、舌よりも真実^{まこと}を語る
涙をば溢^{あふ}らす眼^{まなこ}に、返辞せぬ夫の方を氣遣^{きづか}いて、見れば男は
露一厘身動きなさず無言にて思案の頭^{こうべ}重く低^たれ、ぼろりぼろ
りと膝の上に散らす涙珠^{なみだ}の零^おちて声あり。

源太も今は無言となりしばらくひとり考えしが、十兵衛汝
はまだわからぬか、それとも不足とおもうのか、なるほどせ
っかく望んだことを二人でするは口惜しかろ、しかも源太を心^{しん}

にして副^{そえ}になるのは口惜しかろ、ええ負けてやれこうしてや
ろう、源太は副になつてもよい汝を心に立てるほどに、さあ
さあ清く承知して二人でしようと合点せい、と己^{おの}が望みは無
理に折り、思いきつてぞ云い放つ。とツとんでもない親方様、
たとえ十兵衛氣が狂えばとてどうしてそうはできませんものぞ、
もつたいない、とあわてて云うに、そうなら我の異見につく
か、とただ一言に返されて、それは、と窮^{つま}るをまた追っかけ、
汝を心に立てようか乃至^{ないし}それでも不足か、と烈^{はげ}しく突かれて
度を失^{そは}う傍^{そば}にて女房が氣もわくせき、親方様の御異見になぜ
まあ早く付かれぬ、と責むるがごとく恨みわび、言葉ぞろ
に勧^{すす}むれば十兵衛ついに絶体絶命、下げたる頭^{こうべ}を徐^{しず}かに上げ
円^{つぶら}の眼を剥^むき出して、一ツの仕事^{しごと}を二人でするは、よしや
十兵衛心になつても副になつても、厭^{いと}なりやどうしてもでき
ませぬ、親方一人でお建てなされ、私は馬鹿で終わりまする、
と皆まで云わせず源太は怒つて、これほど事を分けて云う我
の親切^{なさけ}を無にしてもか。はい、ありがとうはござりまするが、
虚言^{うそ}は申せず、厭^{いと}なりやできませぬ。汝^{おのれ}よく云った、源太の
言葉にどうでもつかぬか。是非^{ひと}ないこととござります。やあ
覚えていよこののっそりめ、他の情^{ひと}の分らぬ奴、そのよう
のこと云えた義理か、よしよし汝に口は利かぬ、一生溝^{どぶ}でもい
じって暮せ、五重塔は氣の毒ながら汝に指もささせまい、源
太一人で立派に建てる、ならば手柄に批点^{てん}でも打て。

其十六

えい、ありがとうござります、滅法界に酔いました、もう飲
 やせぬ、と空辞誼はうるさいほどしながら、猪口もつ手を後
 へは退かぬがおかしき上戸の常態、清吉はや馳走酒に十分酔
 ったれど遠慮に三分の真面目をとどめて殊勝らしく坐り込み、
 親方の不在にこう爛酔では済みませぬ、姉御と対酌では夕暮
 を躍るようになってもなりませんからな、アハハむやみに嬉
 しくなつて来ました、もう行きましよう、はめを外すと親方
 のお眼玉だ、だがしかし姉御、内の親方には眼玉を貰つても私
 は嬉しいとおもっています、なにも姉御の前だからとて輕薄
 を云うではありませぬが、真実に内の親方は茶袋よりもあり
 がたいとおもっています、いつぞやの凌雲院の仕事の時も鉄
 や慶を對うにしてつまらぬことから喧嘩を初め、鉄が肩先へ
 大怪我をさしたその後で鉄が親から泣き込まれ、ああ悪かつ
 た気の毒なことをしたと後悔してもこっちも貧乏、どうして
 やるにもやりようなく、困りきつて逃亡とまで思つたところ
 を、黙つて親方から療治手当もしてやつて下された上、かけ
 ら半分叱言らしいことを私に云われず、ただ物らしく、清や汝
 喧嘩は時のはずみで仕方はないが気の毒とおもつたら謝罪つ
 ておけ、鉄が親の氣持もよかり汝の寢覚めもよいというも

のだと心づけて下すつたその時は、ああどうしてこんなに仁慈
 深かろとありがたくてありがたくて私は泣きました、鉄に謝
 罪するわけではないが親方の一言に堪忍して私も謝罪りに行きま
 したが、それから異なるものでいつとなく鉄とは仲好しになり、
 今ではどっちにでもひよつとしたことのあれば骨を拾つてや
 ろうかもらおうかというぐらいの交際になつたも皆親方のお
 蔭、それに引き変え茶袋なんぞはむやみに叱言を云うばかり
 で、やれ喧嘩をするな遊興をするなとくだらぬことを小うる
 さく耳の傍で口説きます、ハハハいやはや話になつたもので
 はありませぬ、え、茶袋とは母親のことです、なに酷くはあ
 りませぬ茶袋でたくさんです、しかも洪をひいた番茶の方で
 す、あツハハハ、ありがとうござります、もう行きましよう、
 え、また一本爛けたから飲んで行けとおっしゃるのですか、
 ああありがたい、茶袋だと此方で一本というところを反對に
 もう廃せと云いますわ、ああ好い心持になりました、歌いた
 くなりましたな、歌えるかとは情ない、松づくしなぞはあい
 つに賞められたほどで、と罪のないことを云えばお吉も笑い
 を含んで、そろそろ慇懃は恐ろしい、などと調戯い居るとこ
 ろへ歸つて来たりし源太、おおちようどよい清吉いたか、お
 吉飲もうぞ、支度させい、清吉今夜は酔い潰れる、胴魔声の
 松づくしでも聞いてやる。や、親方立聞きして居られたな。

清吉酔うてはしまりなくなり、砕けた源太が談話ぶり捌けたお吉が接待ぶりにいつしか遠慮も打ち忘れ、擬されて辞まらず受けてはつと干し酒盞の数重ぬるまに、平常から可愛らしき紅ら顔を一層みずみずと、実の熟った丹波王母珠ほど紅うして、罪もなき高笑いやら相手もなしの空示威、朋輩の誰の噂彼の噂、自己が仮声のどこそこで喝采を獲たる自慢、奪られぬ奪られるの云い争いの末何楼の獅顔火鉢を盗り出さんとして朋友の仙の野郎が大失策をした話、五十間で地廻りを擲ったことなど、縁に引かれ図に乗ってそれからそれへと饒舌り散らすうち、ふとのっそりの噂に火が飛べば、とろりとなりし眼を急に見張って、ぐにやりとしていし肩を聳だて、冷とうなった飲みかけの酒を異しく唇まげながら吸い干し、一体あんな馬鹿野郎を親方の可愛がるというが私には頭からわかりませぬ、仕事といえは馬鹿丁寧で捗びは一向つきはせず、柱一本嶋居一ツで嘘をいえば鉋を三度も礪ぐような緩慢な奴、何を一ツ頼んでも間に合った例がなく、赤松の炉縁一ツに三日の手間を取るというのは、多方ああい手合だろうと仙が笑ったも無理はありません、それを親方が鼻屑にしたので一時は正直のところ、済みませんが私も金も仙も六も、あんまり親方の腹が大きすぎてそれほどでもないものを買ひ込

み過ぎて居るではないか、念入りばかりで氣に入るなら我たちもこれから羽目板にも仕上げ鉋、のろりのろりとしたたか清めて碁盤肌にも削ろうかと癖みを云ったこともありまして、第一あいつは交際知らずで女郎買い一度一所にせず、好闘鶏鍋つつき合ったこともない唐偏朴、いつか大師へ一同が行く時も、まあ親方の身辺について居るものを一人ばかり仲間はずれにするでもないと私が親切に誘ってやったに、我は貧乏で行かれないと云ったきりの挨拶は、なんと愛想も義理も知らな過ぎるではありませんか、銭がなければ女房の一枚着を曲げ込んでも交際は交際で立てるが朋友づく、それわからない白痴の癖に段々親方の恩を被て、私や金と同じごとく今ではどうか一人立ち、しかも憚りながら青涕垂らしで弁当箱の持運び、木片を担いでひよろひよろ帰る餓鬼のころから親方の手についていた私や仙とは違って奴は渡り者、次第を云えば私らより一倍深く親方をありがたい忝ないと思っていなけりやならぬはず、親方、姉御、私は悲しくなつて来ました、私はもしものがあれば親方や姉御のためと云や黒煙の煽りを食つても飛び込むぐらいの了見は持つて居るに、畜生ッ、ああ人情ない野郎め、のっそりめ、あいつは火の中へは恩を背負つても入りきるまい、ろくな根性はもつていまい、ああ人情ない畜生めだ、と酔いが図らず云い出せし不平の中に潜り込んで、めそめそめそ泣き出せば、お

吉は夫の顔を見て、例の癖が出て来たかと困った風情はしながらも自己の胸にもものつそりの憎さがあれば、幾らかは清が言葉を道理と聞く傾きもあるなるべし。

源太は腹に戸締りのなきほど愚かならざれば、猪口を擬しつけ高笑いし、何を云い出した清吉、寝ぼけるな我の前だわ、三の切を出しても初まらぬぞ、その手で女でも口説きやれ、随分ころりと来るであろう、汝が惚けた小蝶さまのお部屋ではない、アツハハハと戯言を云えばなお真面目に、木櫛珠ほどの涙を払うその手をぺたりと刺身皿の中につっこみ、しゃくり上げ戯歎して泣き出し、ああ情ない親方、私を酔漢あしらいは情ない、酔ってはいませぬ、小蝶なんぞは飲べませぬ、そういえばあいつの面がどこかのつそりに似て居るようで口惜しくて情ない、のつそりは憎い奴、親方の対うを張って大それた、五重の塔を生意気にも建てようなんとは憎い奴憎い奴、親方が和し過ぎるので増長した謀反人め、謀反人も明智のようなは道理だと伯龍が講釈しましたがあいつのようなは大悪無道、親方はいつのつそりの頭を鉄扇で打ちました、いつ蘭丸にのつそりの領地を与ると云いました、私は今にもしもあいつが親方の言葉に甘えて名を列べて塔を建てれば打捨つてはおけませぬ、擲き殺して狗にくれますこういうように擲き殺して、と明徳利の横面いきなり打ち飛ばせば、碎片は散って皿小鉢跳り出すやちんからり。馬鹿野郎め、と親方

に大喝されてそのままにぐずりと坐りおとなしく居るかと思えば、散らかりし還原海苔の上に額おしつけはや鼾声なり。源太はこれに打ち笑い、愛嬌のある阿呆めに搔巻かけてやれ、と云いつつ手酌にぐいと引っかけて酒気を吹くことやや久しく、怒って帰って来はしたもののああでは高が清吉同然、さて分別がまだ要るわ。

其十八

源太が怒って帰りし後、腕拱きて茫然たる夫の顔をさし覗きて、吐息つくづくお浪は歎じ、親方様は怒らせる仕事はつまり手に入らず、夜の眼も合わさず雛形まで製造えた幾日の骨折りも苦勞も無益にした揚句の果てに他の氣持を悪うして、恩知らず人情なしと人の口端にかかるのはあまりといえば情ない、女の差し出たことをいうとただ一口に云わるるか知らねど、正直律義もほどのあるもの、親方様があれほどに云うて下さる異見について一緒にしたとて恥辱にはなるまいに、偏僻張ってなんのつまらぬ意気地立て、それを誰が感心なと褒めましょう、親方様の御料簡につけば第一御恩ある親方のお心持もよいわけ、またお前の名も上り苦勞骨折りの甲斐も立つわけ、三方四方みな好いになぜその気にはなられぬか、少しもお前の料簡が妾の腹には合点ぬ、よくまあ思案し直して

親方様の御異見について従うては下されぬか、お前が分別さえ更えれば妾がすぐにも親方様のところへ行き、どうにかこうにか謝罪云うて一生懸命精一杯、打たれても擲かれても動くまいほど覚悟をきめ、謝罪つて謝罪つて謝罪り貰いたらお情深い親方様が、まさかにいつまで怒つてばかりも居られまい、一時の料簡違ひは堪忍して下さることもあろう、分別しかえて意地張らずに、親方様の云われた通りして見る気にはならぬか、と夫思ひの一筋に口説くも女の道理なれど、十兵衛はなお眼も動かさず、ああもう云うてくれるな、ああ、五重塔とも云うてくれるな、よしないことを思いたつてなるほど恩知らずとも云わりよう人情なしとも云わりよう、それも十兵衛の分別が足らいででかしたこと、今さらなんとも是非がない、しかし汝の云うように思案しかえるはどうしても厭、十兵衛が仕事に手下は使おうが助言は頼むまい、人の仕事の手下になつて使われはしうが助言はすまい、桝組も椽配りも我がする日には私の勝手、どこからどこまで一寸たりとも人の指揮は決して受けぬ、善いも悪いも一人で背負つて立つ、他の仕事に使われればただ正直の手間取りとなつて渡されただけのことするばかり、生意気な差し出口は夢にもすまい、自分が主でもない癖に自己が葉色を際立てて異つた風を誇り顔の寄生木は十兵衛の虫が好かぬ、人の仕事に寄生木となるも厭ならわが仕事に寄生木を容るるも虫が嫌えば是非がない、

和しい源太親方が義理人情を噛み砕いてわざわざ慇懃で下さるは我にもわかつてありがたいが、なまじい私の心を生かして寄生木あしらいは情ない、十兵衛は馬鹿でものっそりでもよい、寄生木になつて栄えるは嫌いじゃ、矮小な下草になつて枯れもしよう大樹を頼まば肥料にもなろうが、ただ寄生木になつて高く止まる奴らを日ごろいくらも見ても卑しい奴めと心中で蔑視げていたに、今我が自然親方の情に甘えてそれになるのはどうあつても小恥かしゆうてなりきれぬわ、いっそのことに親方の指揮のとおりこれを削れあれを挽き割れと使わるるなら嬉しけれど、なまじ情がかえつて悲しい、汝も定めてわからぬ奴と恨みもしうが堪忍してくれ、ええ是非がない、わからぬところが十兵衛だ、ここがのっそりだ、馬鹿だ、白痴漢だ、何と云われても仕方はないわ、ああッ火も小さくなつて寒うなつた、もうもう寝てでもしまおうよ、と聴けば一々道理の述懐。お浪もかえす言葉なく無言となれば、なお寒き一室を照らせる行燈も灯花に暗うなりにけり。

其十九

その夜は源太床に入りてもなかなか眠らず、一番鶏二番鶏を耳たしかに聞いて朝も平日よりははよう起き、含嗽手水に見ぬ夢を洗つて熱茶一杯に酒の残り香を払う折しも、むくむ

くと起き上ったる清吉寝惚眼をこすりこすり怪訝顔してまごつくに、お吉ともども噴飯して笑い、清吉昨夜はどうしたか、と翻れば急にかしこまって無茶苦茶に頭を下げ、つい御馳走になり過ぎていつか知らず寝てしまいました、姉御、昨夜私は何か悪いことでもしはしませぬか、と心配そうに尋ぬるもおかしく、まあ何でも好いわ、飯でも食って仕事に行きやれ、と和しく云われてますます畏れ、恍然として腕を組みしきりに考え込む風情、正直なるが可愛らし。

清吉を出しやりたる後、源太はなおも考えにひとり沈みて日ごろの快活とした調子に似もやらず、ろくろくお吉に口さえきかで思案に思案を凝らせしが、ああわかったと独り言するかと思えば、愍然なと溜息つき、ええ抛げようかと云うかとおもえば、どうしてくりようと腹立つ様子を傍にてお吉の見る辛さ、問い慰めんと口を出せば黙っていよとやりこめられ、詮方なさに胸の中にて空しく心をいたむるばかり。源太はそれらに関いもせず夕暮方まで考え考え、ようやく思い定めやしけんつと身を起して衣服をあらため、感応寺に行き上人に見えて昨夜の始終をば隠すことなく物語りし末、一旦は私もあまりわからぬ十兵衛の答えに腹を立てしものの帰ってよくよく考うれば、たとえば私一人して立派に塔は建つるにせよ、それではせっかくお諭しを受けた甲斐なく源太がまた我欲にばかり強いようで男児らしゅうもない話し、というて

十兵衛は十兵衛の思わくを滅多に捨てはすまじき様子、あれも全く自己を押えて譲れば源太も自己を押えてあれに仕事をさせ下されと譲らねばならぬ義理人情、いろいろ愚かな考えを使つてようやく案じ出したことにも十兵衛が乗らねば仕方なく、それを怒つても恨んでも是非のないわけ、はやこの上には変つた分別も私には出ませぬ、ただ願うはお上人様、たとえば十兵衛一人に仰せつけられますればとて私かならず何とも思いますまいほどに、十兵衛になり私になり二人ともどもになりどうとも仰せつけられて下さりませ、御口ずからのことなれば十兵衛も私も互いに争う心は捨てておりまするほどに露さら故障はござりませぬ、我ら二人の相談には余って願いにまいりました、と実意を面に現わしつつ願えば上人ほくほく笑われ、そうじゃろそうじゃろ、さすがに汝も見上げた男じゃ、よいよい、その心がけ一つでもう生雲塔見事に建てたより立派に汝はなっておる、十兵衛も先刻に来て同じことを云うて帰ったわ、あれも可愛い男ではないか、のう源太、可愛がつてやれ可愛がつてやれ、と心ありげに云わるる言葉を源太早くも合点して、ええ可愛がつてやりますとも、いと清しげに答うれば、上人満面皺にして悦びたまいつ、よいわよいわ、ああ気味のよい男児じゃな、と真から底からほめられて、もったいなさはありながら源太おもわず頭をあげ、お蔭で男児になれましたか、と一語に無限の感慨を含めて喜

ぶ男泣き。はやこの時に十兵衛が仕事に助力せん心の、世に美しくも湧きたるなるべし。

其二十

十兵衛感応寺にいたりて朗円上人に見え、涙ながらに辞退の旨云うて帰りしその日の味気なき、煙草のむだけの気も動かすに力なく、茫然としてつくづくわが身の薄命、浮世の渡りぐるしきことなど思い廻らせば思い廻らすほど嬉しからず、時刻になりて食う飯の味が今さら異れるではなけれど、箸持つ手さえ躊躇いがちに舌が美味うは受けとらぬに、平常は六碗七碗を快う喫いしもわずかに一碗二碗で終え、茶ばかりかえつて多く飲むも、心に不悦のある人の免れがたき慣例なり。

主人が浮かねば女房も、何の罪なきやんちやざかりの猪之まで自然と浮き立たず、淋しき貧家のいとど淋しく、希望もなければ快樂も一点あらで日を暮らし、暖か味の無い夢に物寂びた夜を明かしけるが、お浪暁天の鐘に眼覚めて猪之と一所に寝たる床よりそつと出づるも、朝風の寒いに火の無いうちから起すまじ、も少し睡させておこうとの慈しき親の心なるに、何もかも知らないでたわいなく寝ていし平生とは違い、どうせしことやらたちまち飛び起き、襦袢一つで夜具の上跳ね

廻り跳ね廻り、厭じやい厭じやい、父様を打っちゃ厭じやい、と蔵のような手を眼にあてて何かは知らず泣き出せば、ええこれ猪之はどうしたものぞ、とびくりしながら抱き止むるに抱かれながらもなお泣き止まず。誰も父様を打ちはしませぬ、夢でも見たか、それそこに父様はまだ寝て居らるゝ、と顔を押し向け知らずれば不思議そうに覗き込んで、ようやく安心しはしてもまだ疑惑の晴れぬ様子。

猪之やなんにもありはしないわ、夢を見たのじゃ、さあ寒いに風邪をひいてはなりません、床にはいつて寝て居るがよい、と引き倒すようにして横にならせ、掻巻かけて隙間なきよう上から押しつけやる母の顔を見ながら眼をぱっちり、ああ怖かった、今よその怖い人が。お、お、どうかしましたか。大きな、大きな鉄槌で、黙って坐って居る父様の、頭を打って幾つも打って、頭が半分砕けたので坊は大変びっくりした。ええ鶴亀鶴亀、厭なこと、延喜でもないことを云う、と眉を皺むる折も折、戸外を通る納豆売りの戦え声に覚えある奴が、ちエツ忌々しい草鞋が切れた、と打ち独語きて行き過ぐるに女房ますます気色を悪しくし、台所に出て釜の下を焚きつくれば思うごとく燃えざる薪も腹立たしく、引窓の滑りよく明かぬも今さらのように焦れたく、ああ何となく厭な日と思うも心からぞとは知りながら、なお気になることのみ気にすればにや多けれど、また云い出さば笑われんと自分で呵

つて平日よりは笑顔をつくり言葉にも活気をもたせ、いきいきとして夫をあしらい子をあしらえど、根がわざとせし偽飾なればかえって笑いの尻声が憂愁の響きを遺して去る光景の悲しげなるところへ、十兵衛殿お宅か、と押柄に大人びた口ききながらはいり来る小坊主、高慢にちよこんと上り込み、御用あるにつきすぐと来たられべしと前後なしの棒口上。

お浪も不審、十兵衛も分らぬことに思えども辞みもならねば、はや感応寺の門くぐるさえ無益しくは考えつつも、何御用ぞと行って問えば、天地顛倒こりやどうじゃ、夢か現か真実か、円道右に為右衛門左に朗円上人中央に坐したもうて、円道言葉おごそかに、このたび建立なるところの生雲塔の一切工事川越源太に任せられべきはずのところ、方丈思しめし寄らることあり格別の御詮議例外の御慈悲をもって、十兵衛その方ほうにしかとお任せ相成る、辞退の儀は決して無用なり、早々ありがたく御受け申せ、と云い渡さるるそれさえあるに、上人皺枯れたる御声にて、これ十兵衛よ、思う存分し遂げて見い、よう仕上らば嬉しいぞよ、と荷担になうに余る冥加のお言葉。のっそりハツと俯伏せしまま五体を濤と動がして、十兵衛めが生命いのちはさ、さ、さし出しまする、と云いしぎり咽塞のどふさいがりて言語絶え、岑閑しんかんとせし広座敷に何をか語る呼吸の響き幽かにしてまた人の耳に徹しぬ。

紅蓮白蓮の香ゆかしく衣袂に裾に薫り来て、浮葉に露の玉動ぎ立葉に風のそよ吹ける面白の夏の眺望は、赤蜻蛉菱藻を翾り初霜向うが岡の樹梢を染めてより全然となくなったれど、緒色になりて荷の茎ばかり情のう立てる間に、世を忍びげの白鷺がそろりと歩む姿もおかしく、紺青色に暮れて行く天にようやく輝り出す星を背中に擦って飛ぶ雁の、鳴き渡る音も趣味ある不忍の池の景色を下物のほかの下物にして、客に酒をば亀の子ほど飲ます蓬萊屋の裏二階に、氣持のよさそうな顔して欣然と人を待つ男一人。唐棧揃いの淡泊づくりに住吉張りの銀煙管おとなしきは、職人らしき俠氣の風の言語挙動に見えながら毫末も下卑ぬ上品質、いずれ親方親方と多くのものに立てらるる棟梁株とは、かねてから知り居る馴染のお伝という女が、さぞお待ち遠でござりましょう、と膳を置きつつ云う世辞を、待つ退屈さに捕えて、待ち遠で待ち遠で堪りきれぬ、ほんとに人の氣も知らないで何をして居るであろう、と云えば、それでもお化粧に手間の取れますが無理はないはず、と云いさしてホホと笑う慣れきった返しの太刀筋。アハハハそれも道理じゃ、今に来たらばよく見てくれ、まあ恐らくここに類はなからう、というものだ。おや恐ろしい、何を散財おごつて下さります、そして親方、というものは御師匠

さまですか。いいや。娘さんですか。いいや。後家様。いいや。お婆さんですか。馬鹿を云え可愛そうに。では赤ん坊。こいつめ人をからかうな、ハハハハハ。ホホホホとくだらなく笑うところへ襖の外から、お伝さんと名を呼んでお連れ様と知らずれば、立ち上って唐紙明けにかかりながらちよつと後ろ向いて人の顔へ異に眼をくれ無言で笑うは、お嬉しかろと調戲つて焦らして底悦喜さする冗談なれど、源太はかえって心からおかしく思うとも知らずにお伝はすいと明くれば、のろり入り来る客は色ある新造どころか香も艶もなき無骨男、ぼうぼう頭髮のごりごり腮髯、面は汚れて衣服は垢づき破れたる見るから厭氣のぞつとたつほどな様子に、さすがあきて挨拶さえどぎまぎせしまま急には出ず。

源太は笑みを含みながら、さあ十兵衛ここへ来てくれ、関うことはない大胡坐で楽にいてくれ、とおずおずし居るを無理に坐に居え、やがて膳部も具備りし後、さてあらためて飲み干したる酒盃とつて源太は擬し、沈黙で居る十兵衛に對い、十兵衛、先刻に富松をわざわざ遣つてこんなところに来てもらつたは、何でもない、実は仲直りしてもらいたくてだ、どうか汝とわっさり飲んで互いの胸を和熟させ、過日の夜の我が云うたあの云い過ぎも忘れてもらいたいとおもうからのこと、聞いてくれこういうわけだ、過日の夜は実は我もあまり汝をわからぬ奴と一途に思つて腹も立つた、恥かしいが肝癪

も起し業も沸し汝の頭を打碎いてやりたいほどにまでも思うたが、しかし幸福に源太の頭が悪玉にばかりは乗っ取られず、清吉めが家へ来て酔つた揚句に云いちらした無茶苦茶を、あゝ見の小さい奴はつまらぬことを理屈らしく恥かしくもなく云うものだと、聞いているさえおかしくて堪らなさにふとそう思ったその途端、その夜汝の家で陳べ立つて来た我の云い草に気がついて見れば清吉が言葉と似たり寄ったり、ええ間違つた一時の腹立ちに捲き込まれたか残念、源太男が廢る、意地が立たぬ、上人の蔑視も恐ろしい、十兵衛が何もかも捨てて辞退するものを斜に取つて逆意地たてれば大間違ひ、とは思つてもあまり汝のわからな過ぎるが腹立たしく、四方八方どこからどこまで考えて、ここを推せばそこに襷褌が出る、あすこを立てればここに無理があると、まあ我の知恵分別ありたけ尽して我のためばかり籌るではなく云うたことを、むげに云い消されたが忌々しくて忌々しくて随分堪忍もしかねたが、さていよいよ了見を定めて上人様のお眼にかかり所存を申し上げて見れば、よいよいと仰せられたただの一言に雲霧はもうなくなつて、清しい風が大空を吹いて居るような心持になつたわ、昨日はまた上人様からわざわざのお招きで、行つて見たれば我を御賞美のお言葉数々のその上、いよいよ十兵衛に普請一切申しつけたが蔭になつて助けてやれ、皆汝の善根福種になるのじゃ、十兵衛が手には職人もあるまい、彼

がいよいよ取りかかる日には何人も傭うその中に汝が手下の者も交じろう、必ず猜忌邪曲など起さぬようにそれらには汝からよく云い含めてやるがよいとの細かいお諭し、何から今まで見透しでお慈悲深い上人様のありがたさにつくづく我折って帰って来たが、十兵衛、過日の云い過ぎは堪忍してくれ、こうした我の心意気がわかってくれたら従来通り淨く睦まじく交際してもらおう、一切がこう定まって見れば何と思つた彼と思つたは皆夢の中の物詮議、後に遺して面倒こそあれ益ないこと、この不忍の池水にさらりと流して我も忘りよう、十兵衛汝も忘れてくれ、木材の引合い、鳶人足への渡りなど、まだ顔を売り込んでいぬ汝にはちよつとしにくからうが、それらには我の顔も貸そうし手も貸そう、丸丁、山六、遠州屋、いい間屋は皆馴染でうては先方がこつちを呑んでならねば、万事齒痒いことのないよう我を自由に出しに使い、め組の頭の鋭次というは短気なは汝も知って居るであろうが、骨は黒鉄、性根玉は憚りながら火の玉だと平常云うだけ、さてじっくり頼めばぐつと引き受け一寸退かぬ頼もしい男、塔は何より地行が大事、空風火水の四ツを受ける地盤の固めをあれにさせれば、火の玉鋭次が根性だけでも不動が台座の岩より堅く基礎しかと据えさすると諸肌ぬいでしてくるは必定、あれにもやがて紹介しよう、もうこうなった暁には源太が望みはただ一ツ、天晴れ十兵衛汝がよくしでかしさえず

りやそれでよいのじゃ、ただただ塔さえよくできればそれに越した嬉しいことはない、かりそめにも百年千年末世に残つて云わば我たちの弟子筋の奴らが眼にも入るものに、へまがあつては悲しかろうではないか、情ないではなからうか、源太十兵衛時代にはこんなくだらぬ建物に泣いたり笑ったりしたそうなど云われる日には、なあ十兵衛、二人が舍利も魂魄も粉灰にされて消し飛ばさるるわ、拙な細工で世に出ぬは恥もかえつて少ないが、遺したものを弟子めらに笑わる日には馬鹿親父が息子に異見さるると同じく、親に異見を食う子より何段増して恥かしかる、生き磔刑より死んだ後塩漬の上磔刑になるような目にあつてはならぬ、初めは我もこれほどに深くも思い寄らなんだが、汝が我の対面にたったその意張りから、十兵衛に塔建てさせ見よ源太に劣りはすまいというか、源太が建てて見せくりよう何十兵衛に劣ろうぞと、腹の底には木を鑽って出した火で観る先の先、我意はなんにもなくなつたただよくできてくれさえすれば汝も名誉我も悦び、今日はこれだけ云いたいばかり、ああ十兵衛その大きな眼を湿ませて聴いてくれたか嬉しいやい、と磨いて礪いで礪ぎ出した純粹江戸ッ子粘り気なし、一でなければ六と出る、忿怒の裏の温和さもあくまで強き源太が言葉に、身動きさえせで聞きいし十兵衛、何も云わず畳に食いつき、親方、堪忍して下され口がきけませぬ、十兵衛には口がきけませぬ、こ、こ、

この通り、ああありがとうござりまする、と愚かしくもまた眞実にただ平伏して泣きいたり。

其二十二

言葉はなくても眞情は見ゆる十兵衛が挙動に源太は悦び、春風湖を渡つて霞日に蒸すともいふべき温和の景色を面にあらわし、なおもやさしき語氣円暢に、こう打ち解けてしようた上は互いにまずいこともなく、上人様の思召しにもかない我たちの一分も皆立つというもの、ああなんにせよ好い心持、十兵衛汝も過してくれ、我も充分今日こそ酔おう、と云いつつ立つて違い棚に載せて置いたる風呂敷包みとりおろし、結び目として二束にせし書類だし、十兵衛が前に置き、我にあつては要なき此品の、一ツは面倒な材木の委細しい当りを調べたのやら、人足輕子そのほかさまさまの入目を幾晩かかかつてようやく調べあげた積り書、また一ツはあすかをどうしてここをこうしてと工夫に工夫した下絵図、腰屋根の地割りだけなもあり、平地割りだけなもあり、初重の仕形だけのもあり、二手先または三手先、出し組ばかりなるもあり、雲形波形唐草生類彫物のみを書きしもあり、何よりかより面倒なる真柱から内法長押腰長押切目長押に半長押、縁板縁かつら亀腹柱高欄垂木桝肘木、貫やら角木の割合算法、墨縄の

引きよう規尺の取りよう余さず洩らさず記せしもあり、中には我のせしならで家に秘めたる先祖の遺品、外へは出せぬ絵図もあり、京都やら奈良の堂塔を写しとりたるものもあり、これらはみんな汝に預くる、見たらば何かの足しにもなる、と自己が精神を籠めたるものを惜しげもなしに譲りあたうる、胸の広さの頼もしきを解せぬというにはあらざれど、のっそりもまた一ト気性、他の巾着でわが口濡らすようなことは好まず、親方まことにありがとうはござりまするが、御親切は頂戴いたも同然、これはそちらにお納めを、と心はさほどになけれども言葉に膠のなさ過ぎる返辭をすれば、源太大きに悦ばず。此品をば汝は要らぬと云うのか、と慍りを底に匿して問うに、のっそりそうとは氣もつかねば、別段拝借いたしても、と一句うつかり答うる途端、鋭き気性の源太は堪らず、親切の上親切を尽してわが知恵思案を凝らせし絵図までやらんとするものを、むげに返すか慮外なり、何ほど自己が手腕のよくて他の好情を無にするか、そもそも最初に汝めがわが対岸へ廻わりし時にも腹は立ちしが、じつと堪えて争わず、普通大体のものならばわが庇蔭被たる身をもつて一つ仕事に手を入れるか、打ち擲いても飽かぬ奴と、怒って怒ってどうにもすべきを、可愛きものにおもえばこそ一言半句の厭味も云わず、ただただ自然の成行きに任せおきしを忘れしか、上人様のお諭しを受けての後も分別に分別渴らしてわざわざ出

かけ、汝のために相談をかけてやりしも勝手の意地張り、大
体ならぬものとても堪忍なるべきところならぬを、よくよく
汝をいとしがればぞ踏み耐えたるとも知らざるか、汝が運の
よきのみにて汝が手腕のよきのみにて汝が心の正直のみにて、
上人様より今度の工事命けられしと思ひ居るか、此品をばや
つてこの源太が恩がましくでも思うと思うか、乃至はもはや
慢氣の萌して頭からなんのつまらぬものと人の絵図をも易く
思うか、取らぬとあるに強いはせじ、あまりといえは人情な
き奴、ああありがとうござりますると喜び受けてこの中の仕
様を一所二所は用いし上に、あの箇所はお蔭でうもう行きま
したと後で挨拶するほどのことはあつても当然なるに、開け
て見もせず覗きもせず、知れきつたると云わぬばかりに愛想
も菅もなく要らぬとは、汝十兵衛よくも撥ねたの、この源太
がした図の中に汝の知ったもののみあるうや、汝らが工風の
輪の外に源太が跳り出ずにあるうか、見るに足らぬとそちで
思わば汝が手筋も知れてある、大方高の知れた塔建たぬ前か
ら眼に映つて気の毒ながら批難もある、もう堪忍の緒も断れ
たり、卑劣い返報はすまいなれど源太が烈しい意趣返報は、
する時なさでおくべきか、酸くなるほどに今までは口もきい
たがもうきかぬ、一旦思い捨つる上は口きくほどの未練もも
たぬ、三年なりとも十年なりとも返報するに充分なことのあ
るまで、物蔭から眼を光らして睨みつめ無言でじつと待つて

てくりようと、気性が違えば思わくも一二度ついに三度めで
無残至極に齟齬い、いと物静かに言葉を低めて、十兵衛殿、
と殿の字を急につけ出し叮嚀に、要らぬという図はしまいま
しょ、汝一人で建つる塔定めて立派にできようが、地震か風
のあろう時壊るることはあるまいな、と軽くは云えど深く嘲
ける語に十兵衛も快よからず、のっそりでも恥辱は知つてお
ります、と底力味ある楔を打てば、なかなか見事な一言じゃ、
忘れぬように記憶えていようと、釘をさしつつ恐ろしく睥睨
て後は物云わず、やがてたちまち立ち上つて、ああとんでも
ないことを忘れた、十兵衛殿ゆるりと遊んでいてくれ、我は
帰らねばならぬこと思い出した、と風のごとくにその座を去
り、あれという間に推量勘定、幾金か遺してふいと出つ、す
ぐその足で同じ町のある家が闖またぐや否、厭だ厭だ、厭だ
厭だ、つまらぬくだらぬ馬鹿馬鹿しい、ぐずぐずせずと酒も
て来い、蠟燭いじつてそれが食えるか、鈍痴め肴で酒が飲め
るか、小兼春吉お房蝶子四の五の云わせず掴んで来い、臍の
達者な若い衆頼も、我家へ行て清、仙、鉄、政、誰でも彼で
もすぐに遊びによこすよう、という片手間にぐいぐい仰飲る
間もなく入り来る女どもに、今晚なぞとは手ぬるいぞ、とま
つ向から焦躁を吹つけて、飲め、酒は車懸り、猪口は巴と
廻せ廻せ、お房外見をするな、春婆大人ぶるな、ええお蝶め
それでも血が循環つて居るのか頭上に鼈火花載せて火をつく

西方尾嚙又広目天王、南方毘留勒又增長天、
北方毘沙門多聞天王、四天にかたどる四方の柱千年万年動ぐ
など祈り定むる柱立式、天星色星多願の玉女三神、貪狼巨門
等北斗の七星を祭りて願う永久安護、順に柱の仮轄を三ツず
つ打って脇司に打ち緊めさする十兵衛は、幾千の苦心もここ
まで運べば垢穢顔にも光の出るほど喜悦に氣の勇み立ち、動
きなき下津盤根の太柱と式にて唱うる古歌さえも、何とはな
しにつくづく嬉しく、身を立つる世のためしぞとその下の句
を吟ずるにも莞爾しつつ二たびし、壇に向うて礼拝恭み、拍手
の音清く響かし一切成就の祓を終るここの光景には引きかえ
て、源太が家の物淋しさ。

主人は男の心強く思いを外には現わさねど、お吉は何ほど
さばけたりとてさすが女の胸小さく、出入るものに感応寺の
塔の地曳きの今日済みたり柱立式昨日済みしと聞きたびごと
に忌々しく、嫉妬の火炎衝き上がりて、汝十兵衛恩知らずめ、
良人の心の広いのをよいことにしてつけ上り、うまうま名を
揚げ身を立つるか、よし名の揚り身の立たばさしずめ礼にも
来べきはずを、知らぬ顔して鼻高々とその日その日を送りく
さるか、あまりに性質のよ過ぎたる良人も良人なら面憎きの
つそりめもまたのつそりめと、折にふれては八重縦横に癩癩
の虫跳ね廻らし、自己が小髻の後れ毛上げて、ええ焦れつ
たいと罪のなき髪を掻きむしり、一文貰いに乞食が来ても甲

張り声に酷く謝絶りなどしけるが、ある日源太が不在のこ
ろへ心易き医者道益という饒舌坊主遊びに来たりて、
四方八方の話の末、ある人に連れられてこのあいだ蓬萊屋へ
まいりましたが、お伝という女からきました一分始終、い
やどうも此方の棟梁は違ったもの、えらいもの、男児はそう
ありたいと感服いたしました、とお世辞半分何の気なしに云
い出でし詞を、手繰ってその夜の仔細をきけば、知らずにい
てさえ口惜しきに知っては重々憎き十兵衛、お吉いよいよ腹
を立ちぬ。

其二十四

清吉汝は腑甲斐ない、意地も察しもない男、なぜ私には打
ち明けてこないだの夜の始末をば今まで話してくれなかった、
私に聞かして氣の毒と異に遠慮をしたものか、あまりといえ
ば狭隘な根性、よしや仔細を聴いたとてまさか私が狼狽えま
わり動転するようなことはせぬに、女と輕しめて何事も知ら
せずにおき隠し立てしておく良人の了簡はともかくも、汝た
ちまで私を聾に盲目にして済まして居るとはあまりな仕打
ち、また親方の腹の中がみすみす知れていながらに平氣の平
左で酒に浮かれ、女郎買いの供するばかりが男の能でもある
まいに、長閑氣でこうして遊びに来るとは、清吉汝もおめで

たいの、平生は不在でも飲ませるところだが今日は私は関えない、海苔一枚焼いてやるも厭ならくだらぬ世間咄しの相手するも虫が嫌う、飲みたくば勝手に台所へ行って呑み口ひねりや、談話がしたくば猫でも相手にするがよい、と何も知らぬ清吉、道益が帰りし跡へ偶然行き合わせてさんさんにお吉

が不機嫌を浴びせかけられ、わけもわからず驚きあきれて、へどもどなしつつだんだんと様子を問えば、自己も知らずに今の今までいしことなれど、聞けばなるほどどうあっても堪忍のならぬのっそりの憎さ、生命と頼むわが親方に重々恩を被た身をもつて無遠慮過ぎた十兵衛めが処置振り、あくまで親切真実の親方の顔踏みつけたる憎さも憎しどうしてくりよう。

ムム親方と十兵衛とは相撲にならぬ身分の差、のっそり相手に争つては夜光の壁を小礫に擲つけるようなものなれば、腹は十分立たれても分別強く堪えて堪えて、誰にも彼にも鬱憤を洩さず知らさず居らるるなるべし、ええ親方は情ない、ほかの奴はともかく清吉だけには知らしてもよさそうなものを、親方と十兵衛では此方が損、我とのっそりなら損はない、よし、十兵衛め、ただ置こうやと逸りきつたる鼻先思案。姉御、知らぬ中は是非がない、堪忍して下され、様子知っては憚りながらも叱られてはおりますまい、この清吉が女郎買いの供するばかりを能の野郎か野郎でないか見ていて下され、さようならば、と後声烈しく云い捨てて格子戸がらり明けっ

放し、草履もはかず後も見ず風より疾く駆け去れば、お吉今さら氣遣わしくつついて追っかけ呼びとむる二タ声三声、四声めにははや影さえも見えずなったり。

其二十五

材を鉦る斧の音、板削る鉋の音、孔を鑿るやら釘打つやら丁々かちかち響き忙しく、木片は飛んで疾風に木の葉の翻えるがごとく、鋸屑舞って晴天に雪の降る感応寺境内普請場の景況賑やかに、紺の腹掛け頸筋に喰い込むようなをかけて小勝の切り上がった股引いなせに、つつかけ草履の勇み姿、さも伶俐げに働くもあり、汚れ手拭肩にして日当りのよき場所に蹲踞み、悠々然と鑿を硯ぐ衣服の垢穢き爺もあり、道具捜しにまごつく小童、しきりに木を挽く日傭取り、人さまさまの骨折り氣遣い、汗かき息張るその中に、総棟梁ののっそり十兵衛、皆の仕事を監督りかたがた、墨壺墨さし矩尺もって胸三寸にある切組を実物にする指図命令。こう截れああ穿れ、ここをどうしてどうやってそこにこれだけ勾配もたせよ、孕みが何寸凹みは何分と口でも知らせ墨縄でも云わせ、面倒なるは板片に矩尺の仕様を書いてもし、鵜の目鷹の目油断なく必死となりてみずから励み、今しも一人の若伎に彫物の画を描きやらんと余念もなしにいとところへ、野猪よりもなお

疾く塵土を蹴立てて飛び来し清吉。

忿怒の面火玉のごとくし逆釣つたる目を一段視開き、畜生のつそり、くたばれ、と大喝すれば十兵衛驚き、振り向く途端にまっ向より岩も裂けよと打ち下すは、ぎらぎらするまで研ぎ澄ませし鉦を縦にその柄にすぎたる大工に取つての刀なれば、何かは堪らん避くる間足らず左の耳を殺ぎ落され肩先少し切り割かれしが、し損じたりとまた踏ん込んで打つを逃げつつ、抛げつくる釘箱才槌墨壺矩尺、利器のなさに防ぐ術なく、身を翻えして退く機に足を突つ込む道具箱、ぐざと踏み貫く五寸釘、思わず転ぶを得たりやと笠にかかつて清吉が振り冠つたる鉦の刃先に夕日の光の閃りと宿つて空に知られぬ電光の、疾しや遅しやその時この時、背面の方に乳虎一声、馬鹿め、と叫ぶ男あつて二間丸太に論もなく両脇脆く薙ぎ倒せば、倒れてますます怒る清吉、たちまち勃然と起きんとする襟元把つて、やい我だわ、血迷うなこの馬鹿め、と何の苦もなく鉦もぎ取り捨てながら上からぬつと出す顔は、八方睨みの大眼、一文字口怒り鼻、渦巻縮れの両鬢は不動を欺くばかりの相形。

やあ火の玉の親分か、わけがある、打捨つておいてくれ、と力を限り払い除けんと蹴き焦燥るを、栄螺のごとき拳固で鎮圧め、ええ、じたばたすれば拳り殺すぞ、馬鹿め。親分、情ない、ここをここを放してくれ。馬鹿め。ええ分らねえ、

親分、あいつを活かしてはおかれねえのだ。馬鹿野郎め、ベそをかくのか、おとなしくしなければまだ打つぞ。親分酷い。馬鹿め、やかましいわ、拳り殺すぞ。あんまり分らねえ、親分。馬鹿め、それ打つぞ。親分。馬鹿め。放して。馬鹿め。親分。馬鹿め。放して。馬鹿め。親。馬鹿め。放。馬鹿め。お。馬鹿め馬鹿め馬鹿め馬鹿め、醜態を見ろ、おとなしくなつたろう、野郎我が家へ来い、やいどうした、野郎、やあこいつは死んだな、つまらなく弱い奴だな、やあい、どいつか来い、肝心の時は逃げ出して今ごろ十兵衛が周囲に蟻のように群つて何の役に立つ、馬鹿ども、こっちには亡者ができかかって居るのだ、鈍遅め、水でも汲んで来て打つ注けてやれい、落ちた耳を拾つて居る奴があるものか、白痴め、汲んで来たか、関うことはない、一時に手桶の水みんな面へ打つけろ、こんな野郎は脆く生きるものだ、それ占めた、清吉ッ、しっかりしろ、意地のねえ、どれどれこいつは我が背負って行つてやろう、十兵衛が肩の疵は浅かろうな、むむ、よしよし、馬鹿どもさようなら。

其二十六

源太居るかとはいり来たる鋭次を、お吉立ち上つて、おお親分さま、まあまあ此方へと誘えば、ずっと通つて火鉢の前

に無遠慮の大胡坐^{おおあぐら}かき、汲^{くみ}んで出さるる桜湯を半分ばかり飲み干してお吉の顔を視、面色^{いろ}が悪いがどうかしたか、源太はどこぞへ行ったのか、定めしもう聴いたであろうが清吉めがつまらぬことをしでかしての、それゆえちよつと話があつて来たが、むむそうか、もう十兵衛がところへ行つたと、ハハハ、敏捷^{すばや}い敏捷い、さすがに源太だわ、我^{われ}の思案より先に身体がとくに動いて居るなぞは頼もしい、なあにお吉心配することは無い、十兵衛と御上人様に源太が謝罪^{わび}をしてな、自分の示しが足らなかつたで手下^ての奴がとんだ心得違いをしました。幾重^{いくえ}にも勘弁して下されと三ツ四ツ頭を下げれば済んでしまうことだわ、案じ過しはいらぬもの、それでも先方^{さき}がぐずぐずいえば正面^{まとも}に源太が喧嘩を買って破裂^{ばれ}の始末をつければよいさ、薄々聴いた噂では十兵衛も耳朶^{みみたぶ}の一ツや半分斫^きり奪^とられても恨まれぬはず、随分清吉の軽躁^{おつちよこちよい}行為もちよいとおかしい洒落か知れぬ、ハハハ、しかし憫然^{かわいそ}に我の拳固を大分食^{くら}つてうんうん苦しがつて居るばかりか、十兵衛を殺した後はどう始末が着くと我に云われてようやく悟つたかし、ああ悪かつた、逸^{はや}り過ぎた間違つたことをした、親方に頭を下げさすようなことをしたかああ済まない、自分の身体^{みうち}の痛いのより後悔にぼろぼろ涙をこぼしている慙然^{ふびん}さは、なんと可愛い奴ではないか、のうお吉、源太は酷^{むじ}く清吉を叱って叱って十兵衛がとこへ謝罪^{あやまり}に行けとまで云うか知らぬが、

それは表向きの義理なりや是非はないが、ここは汝^{おまえ}の儲け役、あいつをどうか、なあそれ、よしか、そこは源太を抱き寝するほどのお吉様にわからぬことはない寸法か、アハハハハ、源太がいなくて話も要^いらぬ、どれ帰ろうかい御馳走は預けておこう、用があつたらいつでもおいで、とぼつぼつ語つて帰りし後、思えば済まぬことばかり。女の浅き心から分別もなく清吉に毒づきしが、逸りきつたる若き男の間違^{あやまち}いし出して可憫^{あわれ}や清吉は自己^{おのれ}の世を狭^{せば}め、わが身は大切^{だいじ}の所天^{おと}をまで憎うてならぬのつそりに謝罪^{わび}をするようなり行きしは、時の拍子の出来事ながらつまりはわが口より出し過失、兎せん角せん何とすべきと、火鉢の縁^{ふち}に凭^{もた}する肘^{ひじ}のついがっくりと滑るまで、我を忘れて思案に思案凝^もらせしが、思い定めて、おおそうじやと、立つて箆^{たんす}笥^{おほひきだし}の大抽匣、明けて麝香^{じゃこう}の氣^かとともに投げ出し取り出すたしなみの、帯はそもそも此家^{ここ}へ来し嬉し恥かし恐ろしのその時締めし、ええそれよ。ねだつて買つてもろうたる博多に繻子^{しゆす}に未練もなし、三枚重ねに忍^{しの}ばるる往時^{むかし}は罪のない夢なり、今は苦勞^{やま}の山繭^{まづし}縞^{しま}、ひらりと飛ばす飛八丈このごろ好みし毛万筋、千筋百筋氣は乱るとも夫おもうはただ一筋、ただ一筋の唐七糸帶^{からしゆつちん}は、お屋敷奉公せし叔母が紀念^{かたみ}と大切に秘藏^{ひめ}たれど何か厭^{いと}わん手放すを、と何やらかやらありたけ出して婢^{おんな}に包ませ、夫の帰らぬそのうちと櫛^{くし}笄^{けい}も手ばしこく小箱に纏^{まと}めて、さてそれを無残や余所^{よそ}の蔵^{くら}に籠^{こも}らせ、

幾らかの金懷中に浅黄の頭巾小提灯、闇夜も恐れず鋭次が家に。

其二十七

池の端の行き違いより翻然と変りし源太が腹の底、初めは可愛う思いしも今は小癩に障つてならぬその十兵衛に、頭を下げ両手について謝罪らねばならぬ忌々しさ。さりとして打ち捨ておかば清吉の乱暴も我が命令けてさせしかのよう疑がわれて、何も知らぬ身に心地快からぬ濡衣被せられんことの口惜しく、たださえおもしろからぬこのごろよいな魔がさして下らぬ心労いを、馬鹿馬鹿しき清吉めが挙動のためにせねばならぬ苦々しさにますます心平穩ならねど、処弁く道の処弁かで済むべきわけもなければ、これも皆自然に湧きしこと、なんとも是非なしと諦めて厭々ながら十兵衛が家音問れ、不慮の難をば訪い慰め、かつは清吉を戒むること足らざりしを謝び、のっそり夫婦が様子を視るに十兵衛は例の無言三昧、お浪は女の物やさしく、幸い傷も肩のは浅く大したことではござりませぬばどうぞお案じ下されますな、わざわざお見舞い下されては実に恐れ入ります、と如才なく口はきけど言葉遣いのあらたまりて、自然とどこかに稜角あるは問わずと知れし胸の中、もしや源太が清吉に内々含めてさせしかと疑い

居るに極まつたり。

ええ業腹な、十兵衛も大方我をそう視て居るべし、とく時機の来よこの源太が返報仕様を見せてくれん、清吉ごとき卑劣な野郎のしたことに何似るべきか、斬で片耳殺ぎ取るごときくだらぬことを我がしようや、わが腹立ちは木片の火のぱつと燃え立ちすぐ消ゆる、堪えも意地もなきようなることは済まさじ承知せじ、今日の変事は今日の変事、わが癩癩はわが癩癩、まるで別なり関係なし、源太がしうは知るとき知れ悟らす時悟らせくれんと、裏にいよいよ不平は懐けど露塵ほども外には出さず、義理の挨拶見事に済ましてすぐその足を感応寺に向け、上人のお目通り願ひ、一応自己が隸属の者の不埒をお謝罪し、わが家に歸りて、いざこれよりは鋭次に会い、その時清を押えくれたる礼をも演べつその時の景状をも聞きつ、また一ツにはさんざん清を罵り叱つて以後わが家に入入り無用と云いつくれんと立ち出でかけ、お吉のいぬを不審してどこへと問えば、どちらへかちよと行て来るとてお出でになりました、と何食わぬ顔で婢の答え、口禁めされてなりとは知らねば、おおそうか、よしよし、我は火の玉の兄きがところへ遊びに行たとお吉帰らば云うておけ、と草履つつかけ出合いがしら、胡麻竹の杖とぼとぼと焼痕のある提灯片手、老いの歩みの見る目笑止にへの字なりして此方へ来る婆。おお清の母親ではないか。あ、親方様でしたか、

ああ好いところでお眼にかかりましたがどちらへかお出かけでござりまするか、と忙しげに老婆が問うに源太軽く会釈して、まあよいわ、遠慮せずと此方へはいりやれ、わざわざ夜道を拾うて来たは何ぞ急の用か、聴いてあげよう、と立ち戻れば、ハイハイ、ありがとうござります、お出かけのところを済みません、御免下さいまし、ハイハイ、と云いながら後に随いて格子戸くぐり、寒かつたろうによう出て来たの、あいにくお吉もないで関うこともできぬが、縮こまっていずとずっと前へ進で火にでもあたるがよい、と親切に云うてくるる源太が言葉にいいよ身を堅くして縮こまり、お構い下さいましては恐れ入ります、ハイハイ、懷炉を入れておりますればこれで恰好でござります、と意久地なく落ちかかる水涕を洲の立った半天の袖で拭きながらはるか下って入口近きところに蹲まり、何やら云い出したような素振り、源太早くも大方察して老婆の心の中さぞかしと気の毒さ堪らず、よけいなことし出して我に肝煎らせし清吉のお先走りを罵り懲らして、当分出入りならぬ由云いに鋭次がところへ行かんとせし矢先であれど、視ればわが子を除いては阿弥陀様よりほかに親しい者もなかるべきか弱き婆のあわれにて、我清吉

を突き放さば身は腰弱弓の弦に断られし心地して、在るに甲斐なき生命ながらえんに張りもなくのたなくなり、どれほどか悲しみ歎いて多くもあらぬ余生を愚痴の涙の時雨に暮らし、晴れ晴れとした気持のする日もなくて終ることならんと、思いやれば思いやるだけ憫然さの増し、煙草捻ってつい居るに、婆は少しくにじり出で、夜分まいりましてまことに済みませんが、あの少しお願い申したいわけのござりまして、ハイハイ、もう御存知でもござりましょうがあの清吉めがとんだことをいたしましたそうで、ハイハイ、鉄五郎様から大概は聞きましたが、平常からして気の逸い奴で、じきに打つの斫るのと騒ぎましてそのたびにひやひやさせます、お蔭さまで一人前にはなっておりましてまだまだ児童のような真一酷、悪いことや曲ったことは決してしませぬが取り上せては分別のなくなる困った奴で、ハイハイ、悪気は夢さらない奴でござります、ハイハイそれは御存知で、ハイありがとうござります、どういう筋で喧嘩をいたしましたか知りませぬが大それた手斧なんぞを振り舞わしましたそうで、そうきました時は私が手斧で斫られたような心持がいたしました、め組の親分とやらが幸い抱き留めて下されましたとか、まあせめてもでござります、相手が死にでもしましたら彼めは下手人、わたくしは彼を亡くして生きて居る瀬はござりませぬ、ハイありがとうござります、彼めが幼少ときはひどい虫持で苦勞

をさせられましたも大抵ではござりませぬ、ようやく中山の鬼子母神様の御利益で満足には育ちましたが、癒りましたら七歳までにお庭の土を踏ませましようとおきながら、ついなにかにかまけてお礼参りもいたさせなかつたその御罰か、丈夫にはなりましたがあの通りの無鉄砲、毎々お世話をかけます、今日も今日とて鉄五郎様がこれこれと掻い摘んで話されました時の私のびっくり、刃物を準備までして聞いた時には、ええまたかと思わずどつきり胸も裂けそうになりました、め組の親分様とかが預かつて下されたのであれば安心のようなものの、清めは怪我はいたしませぬかと聞けば鉄様の曖昧な返辞、別条はない案じるなと云わるるだけになお案ぜられ、その親分の家を尋ねれば、そこへ汝が行ったがよいか行かぬがよいか我には分らぬ、ともかくも親方様のところへ伺つて見ると云いつ放しで帰つてしまわれ、なおなお胸がしくしく痛んでいても起つても居られませねば、留守を隣家の傘張りに頼んでようやく参りました、どうかめ組の親分とやらの家を教えて下さいまし、ハイハイすぐにまいりますつもりで、どんな態しておりますか、もしやかえって大怪我などして居るのではござりますまいか、よいものならば早う逢つて安堵しとうござりまするし喧嘩の模様も聞きとうござりまする、大丈夫曲つたことはよもやいたすまいと思うておりまするが若い者のこと、ひよつと筋の違つた意趣でも

したわけなら、相手の十兵衛様にまずこの婆が一生懸命で謝罪り、婆はたといどうされても惜しくない老耄、生先の長い彼めが人様に恨まれるようなことのないようにせねばなりませぬ、とおろおろ涙になつての話し。始終を知らで一ト筋にわが子をおもう老いの繰言、この返答には源太こまりぬ。

其二十九

八五郎そこに居るか、誰か来たようだ明けてやれ、と云われて、なんだ不思議な、女らしいぞと口の中で独語ながら、誰だ女嫌いの親分のところへ今ごろ来るのは、さあはいりな、とがらりと戸を引き退くれば、八ッさんお世話、と軽い挨拶、提灯吹き滅して頭巾を脱ぎにかかるは、この盆にもこの正月にも心付けしてくれたお吉と気がついて八五郎めんくらしい、素肌一枚どてらの袷広がつて鼠色になりしふんどしの見ゆるを急に押し隠しなどしつ、親分、なんの、あの、なんの姉御だ、と忙しく奥へ声をかくるに、なんの尽しで分る江戸ッ児。おおそうか、お吉来たの、よく来た、まあそこらの塵埃のなさそうなところへ坐つてくれ、油虫が這つて行くから用心しな、野郎ばかりの家は不潔のが粧飾だから仕方がない、我も汝のような好い鼻でも持ったら清潔にしようよ、アハハハと笑えばお吉も笑いながら、そうしたらまた不潔不潔と厳し

くお叱めなさるか知れぬ、と互いに二ツ三ツ冗話して後、お吉少しく改まり、清吉は眠ておりまするか、どういう様子か見てもやりたし、心にかかれれば参りました、と云えば鋭次も打ち頷き、清は今がたすやすや睡ついで起きそうにもない容態じゃが、疵というて別にあるでもなし頭の顱骨を打ち破ったわけでもなければ、整骨医師の先刻云うには、ひどく逆上したところを滅茶滅茶に撲たれたため一時は気絶までもしたれ、保証大したことはない由、見たくばちよつと覗いて見よ、と先に立って導く後につき行くお吉、三疊ばかりの部屋の中に一切夢で眠り居る清吉を見るに、顔も頭も膨れ上りて、このように撲つてなしたる鋭次の酷さが恨めしきまで可憫な態なれど、済んだことの是非もなく、座に戻つて鋭次に対し、我夫では必ず清吉がよい手出しに腹を立ち、お上人様やら十兵衛への義理をかねて酷く叱るか出入りを禁むるか何とかするでござりましょうが、元はといえば清吉が自分の意恨でしたではなし、つまりは此方のことのため、筋の違つた腹立ちをついむらむらとしたのみなれば、妾はどうも我夫のするばかりを見て居るわけには行かず、ことさら少しわけあつて妾がどうかしてやらねばこの胸の済まぬ仕誼もあり、それやこれやをいろいろと案じた末に浮んだは一年か半年ほど清吉に此地退かすること、人の噂も遠のいて我夫の機嫌も治つたら取り成しようは幾らもあり、まずそれまでは上方あた

りに遊んで居るようしてやりたく、路用の金も調べて来ましたれば少しなれどもお預け申しまする、どうぞよろしく云い含めて清吉めに与つて下さりませ、我夫はあの通り表裏のない人、腹の底にはどう思つても必ず辛く清吉に一旦あたるに違ひなく、未練げなしに叱りましょうが、その時何と清吉がたとい云うても取り上げぬは知れたこと、傍から妾が口を出しても義理は義理なりやしうはなし、さりとして欲でしかした咎でもないに男一人の寄りつく島もないようにして知らぬ顔ではどうしても妾が居られませぬ、彼が一人の母のことは彼さえいねば我夫にも話して扶助るに厭は云わせまじく、また厭というような分らぬことを云いますまいなれば掛念はなけれど、妾が今夜来たことやら蔭で清をばいたわることは、我夫へは当分秘密にして。わかつた、えらい、もう用はなからう、お帰りお帰り、源太が大抵来るかも知れぬ、撞見しては拙かろう、と愛想はなけれど真実はある言葉に、お吉嬉しく頼みおきて帰れば、その後へ引きちがえて来る源太、はたして清吉に、出入りを禁むる師弟の縁断るとの言い渡し。鋭次は笑つて黙り、清吉は泣いて詫びしが、その夜源太の帰りしあと、清吉鋭次にまた泣かせられて、狗になつても我や姉御夫婦の門辺は去らぬと唸りける。

四五日過ぎて清吉は八五郎に送られ、箱根の温泉を志して江戸を出でしが、それよりたどる東海道いたるは京か大阪の、

夢はいつでも東都なるべし。

其三十

十兵衛傷を負うて帰つたる翌朝、平生のごとく夙く起き出づればお浪驚いて急にとどめ、まあ滅相な、ゆるりと臥んでおいでなされおいでなされ、今日は取りわけ朝風の冷たいに破傷風にでもなつたら何となさる、どうか臥んでいて下され、お湯ももうじき沸きましようほどに含嗽手水もそこで妾がさせてあげましよう、と破れ土竈にかけたる羽虧け釜の下焚きつけながら氣を揉んで云えど、一向平氣の十兵衛笑つて、病人あしらいにされるまでのことはない、手拭だけを絞つてもらえば顔も一人で洗うたが好い氣持じゃ、と簞の緩みし小盥にみずから水を汲み取りて、別段悩める容態もなく平日のごとく振舞えば、お浪は呆れかつ案ずるに、のっそり少しも頓着せず朝食終うて立ち上り、いきなり衣物を脱ぎ捨てて股引腹掛け着けにかかるを、とんでもないことどこへ行かるる、何ほど仕事の大事じゃとて昨日の今日は疵口の合いもすまいし痛みも去るまじ、じつとしていよ身体を使うな、仔細はなけれど治癒るまでは万般要慎第一と云われたお医者様の言葉さえあるに、無理押しして感応寺に行かるる心か、強過ぎる、たとい行つたとて働きはなるまじ、行かいでも誰が咎みよう、

行かで済まぬと思わるるなら妾がちよと一ト走り、お上人様のお目にかかつて三日四日の養生を直々に願うて来ましょ、お慈悲深いお上人様の御承知なされぬ氣遣いない、かならず大切にせい軽挙すなとおっしゃるは知れたこと、さあ此衣を着て家に引つ籠み、せめて疵口のすっかり密着くまで沈静いていて下され、とひたすらとどめ宥め慰め、脱ぎしをとつてまた被すれば、よけいな世話を焼かずとよし、腹掛けて着せい、これは要らぬ、と利く右の手にて撥ね退くる。まあそう云わずと家にいて、とまた打ち被する、撥ね退くる、男は意氣地女は情、言葉あらそい果てしなればさすがにのっそり少し怒つて、わけの分らぬ女の方で邪魔立てするか忌々しい奴、よしよし頼まぬ一人で着る、高の知れたる蚯蚓膨れに一日なりとも仕事を休んで職人どもの上に立てるか、汝はちつとも知るまいがの、この十兵衛はおろかしくて馬鹿と常々云わるる身ゆえに職人どもが軽う見て、眼の前ではわが指揮に従い働くようなれど、蔭では勝手に怠惰るやら譏るやらさんさんに茶にしていって、表面こそ粧え誰一人眞実仕事をよくしようという意氣組持つてしてくるものはないわ、ええ情ない、どうかして虚飾でなしに骨を折つてもらいたい、仕事に膏を乗せてもらいたいと、諭せば頭は下げながら横向いて鼻で笑われ、叱れば口に謝罪られて顔色に怒られ、つくづく我折つて下手に出ればすぐと増長さるる口惜しさ悲しさ辛さ、毎日

毎日棟梁棟梁と大勢に立てられるは立派でよけれど腹の中では泣きたいようなことばかり、いっそ穴鑿^{あなほ}りで引つ使われた

ほうが苦しゅうないと思うくらい、その中でどうかこうか此日^{このひ}

まで運ばして来たに今日休んでは大事の蹟^{つまず}き、胸が痛いから

早歸^{はやかへ}ります、頭痛がするで遅くなりましたと皆に怠惰^{なまけ}られるは必定^{ひつじょう}、その時自分が休んで居れば何と一言云いようなく、

仕事^{あまた}が雨垂れ拍子になってできべきものも仕損^{しそ}う道理、万が一にも仕損じてはお上人様源太親方に十兵衛の顔が向けら

りようか、これ、生きても塔がでかねばな、この十兵衛は死んだ同然、死んでも業^{わざ}をし遂げれば汝^{おやじ}が夫は生きて居るわい、

二寸三寸の手斧傷^{ちやうなきず}に臥^ねて居られるか居られぬか、破傷風が怖^{おそ}

ろしいか仕事のできぬが怖ろしいか、よしや片腕奪^とられたと

て一切成就の暁までは駕籠^{かご}に乗っても行かではいぬ、まして

やこれしきの蚯蚓^{みみずば}膨^ふれに、と云いつつお浪が手中より奪いと

ったる腹掛けに、左の手を通さんとして顰^{しか}むる顔、見るに女

房の争えず、争いまして傷をいたわり、ついに半天股引まで

着せて出しける心の中、何とも口には云いがたかるべし。

十兵衛よもや来はせじと思ひ合うたる職人ども、ちらりほ

らりと辰の刻ころより来て見てびっくりする途端、精出して

くるる嬉しいぞ、との一言を十兵衛から受けて皆冷汗をかき

けるが、これより一同^{みなみな}励^{みな}み勤め昨日に変わる身のこなし、一を

きいては三まで働き、二と云われしには四まで動けば、のっ

そり片腕の用を欠いてかえって多くの腕を得つ日々工事抄^{にちにしごと}取り、肩疵治るころには大抵塔もできあがりぬ。

其三十一

時は一月の末つ方、のっそり十兵衛が辛苦経営むなしからで、感応寺生雲塔いよいよものの見事に出来上り、だんだん足場を取り除けば次第次第に露^{あら}わるる一階一階また一階、五重巍^{ぎぜん}然と聳^{そび}えしさま、金剛力士が魔軍を睥睨^{にら}んで十六丈の姿を現じ坤軸動^{こんじくゆる}がす足ぶみして巖^{いわ}上に突つ立ちたるごとく、天晴^{あつぱ}れ立派に建つたるかな、あら快よき細工振りかな、希^け有^うじゃ未曾^{みぞう}有^うじゃまたあるまじと為右衛門より門番までも、初手のっそりを輕^{かろ}しめたることは忘れて讃歎すれば、円道はじめ一山の僧徒も躍^{おど}りあがつて歡喜^{よろこ}び、これでこそ感応寺の五重塔なれ、あら嬉しや、我らが頼む師は当世に肩を比すべき人もなく、八宗九宗の碩^{せき}徳^{とく}たち虎豹^{こひょう}鶴鷺^{かくろ}と勝^すぐれたまえる中にも絶類拔群にて、譬^{たと}えば獅子王^{ししおう}孔雀王^{くわんくわう}、我らが頼むこの寺の塔も絶類拔群にて、奈良や京都はいざ知らず上野浅草芝山内、江戸にて此塔^{これ}に勝^{まさ}るものなし、ことさら塵土に埋もれて光も放たず終るべかりし男を拾いあげられて、心の宝珠^{たまたま}の輝きを世に発^い出^だされし師の美德、困苦に撓^{たゆ}まず知己に酬^{むく}いてついにし遂げし十兵衛が頼もしさ、おもしろくまた美わしき奇因縁な

り妙因縁なり、天のなせしか人のなせしかはたまた諸天善神の蔭^{かげ}にて操りたまひしか、屋^{おく}を造るに巧妙^{たくみ}なりし達膩伽尊者の噂はあれど世尊^{せそん}在世の御時にもかく快きことありしをいまだきかねば漢土^{から}にもきかず、いで落成の式あらば我偈^げを作らん文を作らん、我歌をよみ詩を作して頌^{しょう}せん讃せん詠ぜん記せんと、おのおの互いに語り合ひしは欲のみならぬ人間の情の、やさしくもまた殊勝なるに引き替えて、測りがたきは天の心、円道為右衛門二人が計らいとしていと盛んなる落成式^{しゅうぎょうしき}執行の日もほぼ定まり、その日は貴賤男女の見物をゆるし貧者に剩^{あま}れる金を施し、十兵衛その他を犒^{ねぎ}らい賞する一方には、また伎楽^{ぎがく}を奏して世に珍しき塔供養あるべきはずに支度とりどりなりし最中、夜半の鐘の音の曇^つつて平日には似つかず耳にきたなく聞えしがそもそも、漸々^{ぜんぜん}あやしき風吹き出して、眠れる児童^{こども}も我知らず夜具踏み脱ぐほど時候生暖かくなるとつれ、雨戸のがたつく響き烈^{はげ}しくなりまさり、闇に揉^もまるる松柏^{こすえ}の梢に天魔の号^{きけ}びものすごくも、人の心の平和を奪え平和を奪え、浮世の栄華に誇れる奴らの胆^{きも}を破れや睡^{ねむ}りを攪^{みだ}せや、愚物の胸に血の濤^{なみ}打たせよ、偽物の面の紅き色奪^とれ、斧^{おの}持てる者斧^{ふる}を揮^{ふる}え、矛^{ほこ}もてるもの矛^{ほこ}を揮^{ふる}え、汝^{なんじ}らが鋭^とき剣^{つるぎ}は餓^うえたり汝ら剣に食をあたえよ、人の膏血^{あぶら}はよき食なり汝ら剣にあくまで喰^くわせよ、あくまで人の膏膩^{あぶら}を餌^かえと、号令きびしく発するや否、猛風一陣どつと起つて、斧をもつ夜叉^{やしや}

矛もてる夜叉餓^うえたる剣もてる夜叉、皆一斉に暴^あれ出しぬ。

其三十二

長夜の夢を覚まされて江戸四里四方の老若男女、悪風来たりと驚き騒ぎ、雨戸の横柄^{よこざる}子しつかと挿^させ、辛張り棒を強く張れと家々ごとに狼狽^{うろた}ゆるを、可憫^{あわれ}とも見ぬ飛天夜叉王、怒号の声音^{こわね}ただけしく、汝^{なんじ}ら人を憚^{はば}るな、汝^{なんじ}ら人間^{ひと}に憚^{はば}られよ、人間は我^{われ}らを軽^{かろ}んじたり、久しく我^{われ}らを賤^{いや}しみたり、我^{われ}らに捧^{ささ}ぐべきはずの定め^{にえ}の性を忘れたり、這^はう代りとして立って行く狗、驕奢^{おごり}の埒^{ねぐら}巢^と作れる禽^{とり}、尻尾なき猿、物言^{もの}う蛇、露誠^{まこと}実なき狐の子、汚穢^{けがれ}を知らざる豕^{いのこ}の女、彼らに長く侮^あられてついにいつまで忍^{しの}び得ん、我^{われ}らを長く侮^あらせて彼^{かれ}らをつまで誇^ほらすべき、忍^{しの}ぶべきだけ忍^{しの}びたり誇^ほらすべきだけ誇^ほらしたり、六十四年はすでに過ぎたり、我^{われ}らを縛^はせし機運の鉄鎖、我^{われ}らを囚^{とら}えし慈忍の岩窟^{いわや}はわが神力にてちぎり棄^すてたり崩潰^{くずれ}したり、汝^{なんじ}ら暴^あれよ今こそ暴^あれよ、何十年の恨みの毒氣を彼らに返せ一時に返せ、彼^{かれ}らが驕慢^{はこり}の氣の臭さを鉄圀^{ていさん}山外^{さんげ}に攪^{つか}んで捨てよ、彼^{かれ}らの頭^{こゝろ}を地につかしめよ、無慈悲の斧の刃味のよさを彼^{かれ}らが胸に試みよ、慘酷^{ざんこく}の矛、瞋^{しん}恚^いの劍の刃^はと彼^{かれ}らをなしくれよ、彼^{かれ}らが喉^{のど}に氷を与えて苦寒に怖^{おそ}れ顫^{わな}かしめよ、彼^{かれ}らが胆に針を与えて秘密の痛みに堪えざ

らしめよ、彼らが眼前に彼らが生したる多数の奢侈の子孫を殺して、玩物の念を嗟歎の灰の河に埋めよ、彼らは蚕児の家を奪いぬ汝ら彼らの家を奪えや、彼らは蚕児の知恵を笑いぬ汝ら彼らの知恵を讃せよ、すべて彼らの巧みとおもえる知恵を讃せよ、大とおもえる意を讃せよ、美わしとみずからおもえる情を讃せよ、協えりとなす理を讃せよ、剛しとなせる力を讃せよ、すべては我らの矛の餌なれば、劍の餌なれば斧の餌なれば、讃して後に利器に餌い、よき餌をつくりし彼らを笑え、嬲らるるだけ彼らを嬲れ、急に屠るな嬲り殺せ、活かしながらに一枚一枚皮を剥ぎ取れ、肉を剥ぎとれ、彼らが心臓を鞣として蹴よ、枳棘をもて背を鞭てよ、歎息の呼吸涙の水、動悸の血の音悲鳴の声、それらをすべて人間より取れ、残忍のほか快樂なし、酷烈ならずば汝ら疾く死ね、暴れよ進めよ、無法に住して放逸無慚無理無体に暴れ立て暴れ立て進め進め、神とも戦え仏をも擲け、道理を壊って壊りすてなば天下は我らがものなるぞと、叱咤するたび土石を飛ばして丑の刻より寅の刻、卯となり辰となるまでもちつとも止まず励ましたつれば、数万の眷属勇みをなし、水を渡るは波を蹴かえし、陸を走るは沙を蹴かえし、天地を塵埃に黄ばまして日の光をもほとほと掩い、斧を揮って数寄者が手入れ怠りなき松を冷笑いつつほつきと斫るあり、矛を舞わして板屋根にたちまち穴を穿つもあり、ゆさゆさゆさと怪力もてさも堅固なる家を動かし

橋を揺がすものもあり。手ぬるし手ぬるし酷さが足らぬ、我に続けと憤怒の牙噛み鳴らしつつ夜叉王の躍り上って焦躁でば、虚空に充ち満ちたる眷属、おたけび鋭くおめき叫んで遮に無に暴威を揮うほどに、神前寺内に立てる樹も富家の庭に養われし樹も、声振り絞って泣き悲しみ、見る見る大地の髪の毛は恐怖に一々豎立なし、柳は倒れ竹は割るる折しも、黒雲空に流れて檜の実よりも大きな雨ばらりばらりと降り出せば、得たりとますます暴るる夜叉、垣を引き捨て塀を蹴倒し、門をも破し屋根をもめくり軒端の瓦を踏み砕き、ただ一揉みに屑屋を飛ばし二タ揉み揉んでは二階を捻じ取り、三たび揉んでは某寺をものの見事に潰し崩し、どうどうどと闐をあぐるそのたびごとに心を冷やし胸を騒がす人々の、あれに気づかいこれに案ずる笑止の様を見ては喜び、居所さえもなくされて悲しむものを見ては喜び、いよいよ図に乗り狼藉のあらん限りを逞しゅうすれば、八百八町百万の人みな生ける心地せず顔色さらにあらばこそ。

中にもわけて驚きしは円道為右衛門、せっかくわずかに出来上りし五重塔は揉まれ揉まれて九輪は動き、頂上の宝珠は空に得読めぬ字を書き、岩をも転ばすべき風の突っかけ来たり、楯をも貫くべき雨のぶつかり来るたび撓む姿、木の軋る音、復る姿、また撓む姿、軋る音、今にも傾覆らんず様子に、あれあれ危し仕様はなきか、傾覆られては大事なり、止むる術

もなきことか、雨さえ加わり来たりし上周囲に樹木もあらざれば、未曾有の風に基礎狭くて丈のみ高きこの塔の堪えんことのおぼつかなし、本堂さえもこれほどに動けば塔はいかばかりぞ、風を止むる呪文はきかぬか、かく恐ろしき大暴風雨に見舞いに来べき源太は見えぬか、まだ新しき出入りなりとて重々来ではかなわざる十兵衛見えぬか寛怠なり、他さえかほど気づかうに己がせし塔気につけぬか、あれあれ危しまた撓んだわ、誰か十兵衛招びに行け、といえども天に瓦飛び板飛び、地上に砂利の舞う中を行かんというものがなく、ようやく賞美の金に飽かして掃除人の七蔵爺を出しやりぬ。

其三十三

毫碌頭巾に首をつつみてその上に雨を凌がん準備の竹の皮笠引き被り、鳶子合羽に胴締めして手ごろの杖持ち、恐怖ながら烈風強雨の中を駈け抜けたる七蔵爺、ようやく十兵衛が家にいたれば、これはまた酷いこと、屋根半分はもうとうに風に奪られて見るさえ気の毒な親子三人の有様、隅の方にかたまり合うて天井より落ち来る点滴の飛沫を古筵でわずかに避け居る始末に、さてもものっそりは気に働らきのない男と呆れ果てつつ、これ棟梁殿、この暴風雨にそうして居られては済むまい、瓦が飛ぶ樹が折れる、戸外はまるで戦争のような

騒ぎの中に、汝の建てられたあの塔はどうあろうと思わるる、丈は高し周囲に物はなし基礎は狭し、どの方角から吹く風をも正面に受けて揺れるわ揺れるわ、旗竿ほどに撓んではきちきちと材の軋る音の物凄さ、今にも倒れるか壊れるかと、円道様も為右衛門様も胆を冷やしたり縮ましたりして気が気ではなく心配して居らるるに、一体ならば迎いなど受けずともこの天変を知らず顔では済まぬ汝が出て来ぬとはあんまりな大勇、汝のお蔭で険難な使いをいいつかり、忌々しいこの瘤を見てくれ、笠は吹き攪われるず濡れにはなる、おまけに木片が飛んで来て額にぶつかりくさったぞ、いい面の皮とは我がこと、さあさあ一所に来てくれ来てくれ、為右衛門様円道様が連れて来いとのお命令だわ、ええびつくりした、雨戸が飛んで行ってしまうのか、これだもの塔が堪るものか、話しする間にももう倒れたか折れたか知れぬ、ぐずぐずせずと身支度せい、はやくはやくと急り立つれば、傍から女房も心配げに、出て行かるるなら途中が危険、腐ってもあの火事頭巾、あれを出しましよ冠つておいでなされ、何が飛んで来るか知れたものではなし、外見よりは身が大切、いくら檻樓でも仕方ない刺子絆纏も上に被ておいでなされ、と戸棚がたがた明けにかかるを、十兵衛不興げの眼でじっと見ながら、ああ構うてくれずともよい、出ては行かぬわ、風が吹いたとて騒ぐには及ばぬ、七蔵殿御苦労でござりましたが塔は大丈夫

倒れませぬ、なんのこれほどの暴風雨で倒れたり折れたりするような脆いものではござりませねば、十兵衛が出かけてまいるにも及びませぬ、円道様にも為右衛門様にもそう云うて下され、大丈夫、大丈夫でござります、と泰然はらって身動きもせず答うれば、七蔵少し膨れ面して、まあともかくも我と一緒に来てくれ、来て見るがよい、あの塔のゆさゆさきちきちと動くさまを、ここにいて目に見ねばこそ威張って居るれ、御開帳の幟のように頭を振って居るさまを見られたらなんぼ十兵衛殿寛濶な気性でも、お気の毒ながら魂魄がふわりふわりとならるであらう、蔭で強いのが役にはたたぬ、さあさあ一所に來たり來たり、それまた吹くわ、ああ恐ろしい、なかなか止みそうにもない風の景色、円道様も為右衛門様も定めし肝を煎っておらるるじやろ、さっさと頭巾なり絆纏なり冠るとも被るともして出かけさっしやれ、とやり返す。大丈夫でござりまする、御安心なさってお帰り、と突っぱねる。その安心がそう手易くはできぬわい、とうるさく云う。大丈夫でござりまする、と同じことをいう。末には七蔵焦れこんで、なんでもかでも来いというたら来い、私の言葉とおもうたら違うぞ円道様為右衛門様の御命令じゃ、と語気あらくなれば十兵衛も少し勃然として、我は円道様為右衛門様から五重塔建ていとは命令かりませぬ、お上人様は定めし風が吹いたからとて十兵衛よべとおっしゃりますまい、そのよ

うな情ないことを云うては下さりますまい、もしもお上人様までが塔危いぞ十兵衛呼べと云わるるようになれば、十兵衛一期の大事、死ぬか生きるかの瀬門に乗っかかる時、天命を覚悟して駈けつけましようなれど、お上人様が一言半句十兵衛の細工をお疑いなさらぬ以上は何心配のこともなし、余の人たちが何を云わりようと、紙を材にして仕事もせず魔術も手抜きもしていぬ十兵衛、天氣のよい日と同じことに雨の降る日も風の夜も楽々としておりまする、暴風雨が怖いものでなければ地震が怖うもござりませぬと円道様にいうて下され、と愛想なく云い切るにぞ、七蔵仕方なく風雨の中を駈け抜けて感応寺に帰りつき円道為右衛門にこのよし云えば、さてもその場に臨んでの知恵のない奴め、なぜその時に上人様が十兵衛来いとの仰せじやとは云わぬ、あれあれあの揺る態を見よ、汝までがのっそりに同化れて寛怠過ぎた了見じゃ、是非はない、も一度行つて上人様のお言葉じやと欺訛り、文句いわず連れ来て来い、と円道に烈しく叱られ、忌々しさに独語きつつ七蔵ふたたび寺門を出でぬ。

其三十四

さあ十兵衛、今度は是非に來よ四の五のは云わせぬ、上人様のお召しじやぞ、と七蔵爺いきりきつて門口から我鳴れば、

十兵衛聞くより身を起して、なにあの、上人様のお召しなさるとか、七蔵殿それは真実でござりまするか、ああなさけない、何ほど風の強ければとて頼みきつたる上人様までが、この十兵衛の一心かけて建てたものを脆くも破壊るるかのよう
に思し召されたか口惜しい、世界に我を慈悲の眼で見て下さるるただ一つの神とも仏ともおもうていた上人様にも、真底からはわが手腕たしかと思われざりしか、つくづく頼もしげなき世間、もう十兵衛の生き甲斐なし、たまたま当時に双びなき尊き智識に知られしを、これ一生の面目とおもうて空に悦びしも真にはかなきしばしの夢、嵐の風のそよと吹けば丹誠凝らせしあの塔も倒れやせんと疑わるるとは、ええ腹の立つ、泣きたいような、それほど我は腑のない奴か、恥をも知らぬ奴と見ゆるか、自己がしたる仕事が恥辱を受けてものめめ面押し拭うて自己は生きて居るような男と我は見らるか、たとえばあの塔倒れた時生きていようか生きたかろうか、ええ口惜しい、腹の立つ、お浪、それほど我が鄙しかろうか、あゝあゝ生命ももういらぬ、わが身体にも愛想の尽きた、この世の中から見放された十兵衛は生きて居るだけ恥辱をかく苦悩を受ける、ええいっそのこと塔も倒れよ暴風雨もこの上烈しくなれ、少しなりともあの塔に損じのできてくれよかし、空吹く風も地打つ雨も人間ほど我には情なからねば、塔破壊されても倒されても悦びこそせめ恨みはせじ、板一枚

の吹きめくられ釘一本の抜かるとも、味気なき世に未練はもたねばものの見事に死んで退けて、十兵衛という愚魯漢は自己が業の粗漏より恥辱を受けても、生命惜しさに生存えて居るような鄙劣な奴ではなかりしか、かかる心をもつていかと責めては後にて弔われん、一度はどうせ捨つる身の捨て処よし捨て時よし、仏寺を汚すは恐れあれどわが建てしもの壊れしならばその場を一步立ち去り得べきや、諸仏菩薩もお許しあれ、生雲塔の頂上より直ちに飛んで身を捨てん、投ぐる五尺の皮囊は潰れて醜かるべきも、きたなきものを盛つてはおらず、あわれ男児の醇粹、清浄の血を流さんなれば愍然ともこそ照覧あれと、おもいしことやら思わざりしや十兵衛自身も半分知らで、夢路をいつの間にかたどりし、七蔵にさえどこでか分れて、ここは、おお、それ、その塔なり。

上りつめたる第五層の戸を押し明けて今しもぬつと十兵衛半身あらわせば、礫を投ぐるがごとき暴雨の眼も明けさせず面を打ち、一ツ残りし耳までもちぎらんばかりに猛風の呼吸さえさせず吹きかくるに、思わず一足退きしが屈せず奮って立ち出でつ、欄を握んできつと睥めば天は五月の闇より黒く、ただ囂々たる風の音のみ宇宙に充ちて物騒がしく、さしも堅固の塔なれど虚空に高く聳えたれば、どうどうどつと風の来るたびゆらめき動きて、荒浪の上に揉まるる棚なし小舟のあわや傾覆らん風情、さすが覚悟を極めたりしもまた今さらに

おもわれて、一期の大事死生の岐路と八万四千の身の毛よだたせ牙咬みしめて眼を睜り、いざその時はと手にして来し六分鑿の柄忘るるばかり引つ握んでぞ、天命を静かに待つとも知るや知らずや、風雨いとわず塔の周囲を幾たびとなく徘徊する、怪しの男一人ありけり。

其三十五

去る日の暴風雨は我ら生まれてから以来第一の騒ぎなりしと、常は何事に逢うても二十年前三十年前にありし例をひき出して古きを大げさに、新しきをわけもなく云い消す氣質の老人さえ、真底我折って噂し合えば、まして天変地異をおもしろずくで談話の種子にするような剽軽な若い人は分別もなく、後腹の疾まぬを幸い、どこの火の見が壊れたりかしこの二階が吹き飛ばされたりと、他の憂い災難をわが茶受けとし、醜態を見よ馬鹿欲から芝居の金主して何某め痛い目に逢うたるなるべし、さても笑止あの小屋の潰れ方はよ、また日ごろより小面憎かりし横町の生花の宗匠が二階、お神楽だけのことはありしも気味よし、それよりは江戸で一二といわるる大寺の脆く倒れたも仔細こそあれ、実は檀徒から多分の寄附金集めながら役僧の私曲、受負師の手品、そこにはそのありし由、察するに本堂のあの太い柱も桶でがなあったろうなん

どとさまさまの沙汰に及びけるが、いずれも感應寺生雲塔の釘一本ゆるまず板一枚剥がれざりしには舌を巻きて讃歎し、いや彼塔を作った十兵衛というはなんとえらいものではござらぬか、あの塔倒れたら生きてはいぬ覚悟であったそうな、すでのことに鑿啣んで十六間真逆しまに飛ぶところ、欄干をこう踏み、風雨を睨んであれほどの大揉めの中にじつと構えていたというが、その一念でも破壊るまい、風の神も大方血眼で睨まれては遠慮が出たであろうか、甚五郎このかたの名人じゃ真の棟梁じゃ、浅草のも芝のもそれぞれ損じのあったに一寸一分歪みもせず退りもせぬとはよう造ったことの。いやそれについて話しのある、その十兵衛という男の親分がまた滅法えらいもので、もしもちとなり破壊れでもしたら同職の恥辱知合いの面汚し、汝はそれでも生きて居らりようかと、とても再び鉄槌も手斧も握ることのできぬほど引つ叱って、武士で云わば詰腹同様の目に逢わしようと、ぐるぐるぐる大雨を浴びながら塔の周囲を巡っていたそうな。いやいや、それは間違い、親分ではない商売上敵じゃそうな、と我れ知り顔に語り伝えぬ。

暴風雨のために準備狂いし落成式もいよいよ済みし日、上人わざわざ源太を召びたまいて十兵衛とともに塔に上られ、心あって雛僧に持たせられしお筆に墨汁したたか含ませ、我この塔に銘じて得させん、十兵衛も見よ源太も見よと宣いつ

つ、江都の住人十兵衛これを造り川越源太郎これを成す、年月日とぞ筆太に記しおわられ、満面に笑みを湛えて振り顧りたまえば、兩人ともに言葉なくただ平伏して拝謝みけるが、それより宝塔長えに天に聳えて、西より瞻れば飛檐ある時素月を吐き、東より望めば勾欄夕べに紅日を呑んで、百有余年の今になるまで、譚は活きて遺りける。